



Title	中井履軒『昔の旅』翻刻訳注および解説
Author(s)	矢羽野, 隆男; 湯城, 吉信; 井上, 了 他
Citation	懐徳堂センター報. 2005, 2005, p. 83-128
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24366
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中井履軒『昔の旅』翻刻訳注および解説

矢野野隆男 湯城吉信 井上了 佐野大介
池田光子 黒田秀教 上野洋子 杉山一也

明和八年(辛卯、一七七二)春、中井履軒(一七三二〜一八一七)は兄竹山(一七三〇〜一八〇四)と共に龍野を訪れた。龍野は亡父贅庵の故郷で、家督を継いだ伯父をはじめ親族が住む。履軒はこの旅の顛末を、昔の文章博士一行の旅に仮託し、和文による紀行文的な物語『昔の旅』に仕立てた。巻末に「辛卯の年 季春」とあり、履軒四〇歳三月の作である。

物語の大筋は次の通り。如月の頃、昔のとある文章博士(竹山がモデル)のもとに播磨国の揖保(龍野)に住むおじ「岡の翁」から手紙が届いた。老いに病の加わった心細さから「会いたい」と書いて寄こしたのである。おじを見舞うため、三月三日の夜、博士は弟の内記(履軒がモデル)や二人の文章生らと共に揖保へ旅立った。道すがら名勝を愛で人情に触れて和歌漢詩を詠み、揖保では親族と旧交を温め、墓参や遠出などして日を過ごす。その一方で精力的に当地の孝婦貞婦を訪ねて金品を贈るなどし、二十日足らずの滞在の後、別れを惜んで帰路につくのであった。

『昔の旅』は〈昔の公家の世界〉に設定された虚構であるが、そこに述べられた事実に基づく内容は注目に値する。それは竹山・履軒の龍野における活動を髣髴させ、懷徳堂の重要な社会活動である孝子貞婦顕彰活動の実態を知る手がかりともなる。

懷徳堂文庫には経書史書への注釈や詩文といった漢文による文献だけで

はなく、和文の文献も多い。平成一三年度から一五年度にかけて、科学研究費補助金による研究「デジタルコンテンツとしての懷徳堂研究」(研究代表者 下條真司)の一環として貴重資料調査が行われた。その研究協力者である我々は、和文文献の重要性を感じ、共同で基礎研究を始めた。本稿はその共同研究の成果である。

先ず『昔の旅』の翻刻および訳注を掲げ、後ろに「解説」を付した。「解説」では、研究過程で得られた知見を集約し、『昔の旅』の特徴を説明するとともに、その懷徳堂の孝子貞婦顕彰活動における意義を概説した。

『昔の旅』翻刻訳注

凡例

- 一、大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵の中井履軒手稿本を底本とした。
- 一、全文を三十二段および《末尾》に分ち、各段に「本文(漢詩には書き下し文を付す)」「現代語訳」「校異」「注」を掲げた。なお、一段中を更に分けるのが望ましい場合は、適宜改行した。
- 一、懷徳堂文庫新田文庫蔵の写本(略称「新田本」)、大阪府立中之島図書館蔵の写本(略称「中之島本」)および『小天地閣叢書』所収の写本(略称「小天地閣本」)の諸本を参照し、底本との異同を「校異」に

示した。その際、先ず諸本の表記をそのまま記し、濁音で読む字は直後に（ ）で示した。

一、底本の誤りと思われるものは、右に「ママ」とした。

一、変体仮名は通行仮名に改め、「ミ」「ハ」「也」「哉」等はそれぞれ「み」「は」「なり」「かな」等に改めた。

一、漢字の旧字体・異体字は、現行の字体に改めた。

一、底本、諸本とも漢字に振り仮名はないが、難読字には適宜振り仮名を付した。

一、「ゝ」「く」などの反復記号についてはそのまま残し、漢字の場合には「人々」などのように残した。

一、濁音には、濁点を付す「小天地閣本」を参考に濁点を施した。

一、底本には読点のみがあるが、適宜句点を施した。

一、本文中の会話や心中思惟等には「」を付した。

一、現代語訳において、文意の補足は「」に、注記は（ ）に括った。

一、執筆担当箇所（文責）は以下の通りである。

《一》	《四》	矢羽野
《五》	《八》	湯城
《九》	《一二》	井上
《一三》	《一五》	佐野
《一六》	《二〇》	池田
《二一》	《二五》	黒田
《二六》	《二九》	上野
《三〇》	《末尾》	杉山

《一》むかし文章^{もんじやう}の博士ありけり。そがおぢに岡の翁と聞ゆる、はりまの国いぼのわたりに、年へてすみける。きさらぎのころ、「老木^{おいき}の桜くちまさり、いやましに見まくほし」と、せうそこしける。さらでだに、年ごろおぼつかなく、いひおもひたまひしを、まいてやまうにさへふししづみ給ふけると聞て、「おほやけのしげきわざは、さることなれど、ことしのみかは」とて、すこしたゆめるおりすぐさず、廿日ばかりのおこたり、まうしたまはりて、三月三かの夜なん、難波より舟出しける。

【現代語訳】昔、文章博士がいた。その伯父に岡の翁という方があり、播磨の国の揖保川辺りに長年住んでいた。如月の頃、「その伯父から」「桜の老木が更に枯れ衰え、ますます会いたい」と便りがあつた。そうでなくても、数年来「伯父のことが」気がかりだと言つたり思つたりしておられたのに、さらに加えて病の床にまで伏してしまわれたと聞いて、「多忙な公務は言うまでも無いことだが、それは今年だけのことであろうか（今年だけではない）」と考えて、少し仕事にゆとりのある時期を逃さず、二十日ほどの休暇を願ひ受けて、三月三日の夜に難波の港から船出した。

【注】○文章の博士 律令制下の式部省に属した官吏養成機関である大学寮で、文章道^{もんじやうだう}を教授した教官。文章道は、明経道^{みやうきやうだう}から分離したもので、漢詩文や史書を対象として学ぶ。神龜五年（七二八）に定員一

人を置き、平安後期以降は、菅原・大江・藤原の三氏が世襲した。○岡の翁 中井竹山・履軒兄弟の伯父中井伯元（一六八八〜一七七五）をさす。竹山・履軒の父中井懿庵（一六九三〜一七五八）には兄三人と弟一人があつた。伯元は懿庵の次兄で、幼くして叔父玄意の養嗣子となり、三五歳で龍野藩の藩医の家督を継ぎ、八一歳で隠居するまで五代の藩主に仕えた。和歌を嗜み、加藤竹里などとも交流のある粹人で「鳳岡先生」と称され、隠居後は「睡翁」と称し、八八歳の長寿を得た。○はりまの国いぼのわたり 播磨国の南西部を流れる揖保川流域。一行の目指した龍野は揖保川西岸の揖西郡に属し、脇坂氏五万一千石の城下町であつた。○老木の桜 年月を経て老いた桜。ここでは、年老いた岡の翁を指す。第三二段にも、翁の詠んだ歌に「老木の桜までも」と見える。

《二》川舟にて、あまが崎よりはあがりぬ。はかせの弟に、内記なりける人と、文章生ふたり、侍にたてゝいきけり。一人は野氏なり。またひとり源氏なりけり。道すがらの、文うたのかたきのれうなるべし。そが外には、下部ひとりふたり、あやしの物かつぎて、馬のしりにつかうまつれり。おほやけのおん使に出たつなどは、ものきらゝかに、人おほくて、かしがましかるべきを、もとよりわたくしのことにしのびたるものから、むかしはなにことも、かくかろらかに、めやすかりし。さればわびしさも、おかしさも、数まさりぬべき。今

やうはおもりにて、かうやうの旅なん、いとかたし。

【現代語訳】 川舟に乗り、尼崎から上陸した。博士の弟で内記の官にある人と、文章生二人とを従者に仕立てて行つた。「文章生のうち一人は野氏である。もう一人は源氏であつた。〔彼ら二人は〕道中で詩文の相手として供に加えられたのであろう。その他には、召使が一人二人、粗末な荷物を担いで馬の後ろについてお仕え申し上げた。朝廷の使者として旅するような場合には、荷物は美々しく、お供の数も多く、騒がしくなるものだけれども、〔今回は〕はじめから私的な特に内々に行く旅とはいえ、昔は何事につけてもこのように軽快で、見た目がこざつぱりしていた。だから、もの悲しいことも楽しいことも、〔今に比べて〕多かつたのであろう。当世風は重々しくて、このような旅をするのはとても難しいことだ。

【校異】 *一人 新田本「ひとり」。*また 新田本「又」。*あやしの物 新田本「あやしのもの」。*ものきらゝかに 新田本「物きらゝかに」。*おほくて 新田本「多くて」。*なにごと 新田本「何事」。*旅なん 新田本「旅なむ」。

【注】 ○あまが崎 現在、兵庫県尼崎市。摂津国川辺郡に属し、松平氏四万石の城下町。山陽道を下る場合、大坂から三里離れた第一番目の宿場。○内記 律令制下の中務省に属し、詔勅や宣命起草し、宮中の事々を記録する官。大・中・小各々二人あり、能文・能筆の者が選任された。○文章生 大学寮で文章道を学ぶ学生。○野氏 文章生

出身のおのつゝかむ小野篁（八〇二〜八五二）ら詩文に長じた小野氏をイメージしたものであろう。「野氏」は小野氏の漢人風の表記。○源氏 文章生出身のみなもろのきう源順（九一一〜九八三）ら詩文に長じた源氏をイメージしたものであろう。

《三》まことや、その前の夜なん、したしきかぎり、おくりきて、川*のほとりにをりゐて、酒すゝめ、から歌つくれり。

山陽駅路動征鑣 山陽の駅路に征鑣せいひょうを動かし、
分手華川縮柳朝 手を分かつ華川に柳を縮わがめる朝。
曉日錦袍侵露湿 曉日に錦袍は露に侵されて湿い、
晚風驄馬蹴花驕 晚風に驄馬そうばは花を蹴さかんつて驕なり。
舞浜万樹潮頭接 舞浜の万樹 潮頭に接し、
淡島千帆望際遥 淡島の千帆 望際に遥かなり。
到处春光泉石富 到处春光 泉石に富み、
好教囊裡滿瓊瑤 囊裡のうりに瓊瑤けいようを満たしむるに好し。

与隣*

並轡群仙幾日帰 轡たるなを並ぶる群仙 幾日か帰る、
揚鞭雲際紫騮飛 鞭むちを雲際に揚げ 紫騮しりゅう飛ぶ。
龍山遊屐花応好 龍山に屐げきを遊ばすれば 花は応まさに好よかるべく、
鶴水垂綸魚亦肥 鶴水かくすいに綸いとを垂るれば 魚も亦肥えむ。

離席窮歎交巨爵 離席 歎を窮めて巨爵を交わし、
詩朋惜別引征衣 詩朋 別れを惜しんで征衣を引く。
前程豈道千余里 前程 豈あた千余里と道いわんや、
独恨風光兩地違 独ただ恨む 風光 兩地違ちがうを。

恥叔*

分手春江上 手を分かつ 春江はとうりの上、
長程興不窮 長程 興きよう窮まらず。
輕舟垂柳浪 輕舟 垂柳の浪、
去馬落花風 去馬 落花の風。
山碧清煙外 山は碧みどりなり 清煙の外、
海明斜日中 海は明らかなり 斜日の中。
壯遊は元より願う所なるも、
未だ君と同じうするを得ず。

彪外*

莫怪滿山雲 怪なしむ 莫れ 滿山の雲、
夜来暗風雨 夜来 風雨暗きを。
双起平輿龍 双ならび起つ 平輿の龍、
西飛帶繡虎 西に飛んで 繡虎を帶ぶれば。
子淵*

おほかれど、さのみやはとて、もらしつ。

【現代語訳】ところで、その前の夜に、親しい者がみな見送りに来て、岸辺に座って、酒を勧めて、漢詩を作った。

山陽道に旅の馬を進め、華川で友に別れて柳の枝を曲げる朝。

朝日を浴びて錦の長衣は露に濡れて潤い、夕方の風に吹かれて馬は花を蹴って元氣よかろう。

舞子の浜の木々（青松）は海に連なり、淡路島を背景に浮かぶ多くの帆は遙か遠くに望まれる。

到るところ春光にあふれ山水のよい景色にはこと足りる。道中作った詩で袋をいっぱいにするだろう。

与隣

馬を並べて旅立つ一群れの仙人たちはいつ帰って来るのだろうか。雲のかかるこの地に鞭を揚げると駿馬は天翔ける。

龍野の山々を巡ればきつと桜は見頃だろうし、加古川に釣り糸を垂れば魚も肥えて美味かろう。

別離の宴では存分に楽しんで大盃に酒を酌み交わし、見送る友は別れを惜しんで旅の衣を引き留める。

道のりは千余里とはいえないが、ただ残念なのは向こうとこちらとは景色の余りに違うこと。

恥叔

春の川辺で別れてからは、長い道中楽しみは尽きまい。

軽快な舟は柳が枝垂れる波の上を滑り行き、行く馬は桜が散る風の中を進むのだろう。また、山は清らかな霞の向こうに青々のぞき、海は夕日を映して明るく澄み渡っているよう。

こんな楽しい旅をしたいとずっと前から願っていたが、君たちと

一緒に行けないのが残念だ。

彪外

怪しむには足りないよ、山全体に雲がかかり、昨夜から雨風で真つ暗だったのも。

「平興の龍」（ともいうべき博士・内記の兄弟）が二人並んで旅立ち、「繡虎」（というべき文才有る学生）を連れて西に向けて飛び行くのだから。

子淵

【餞別の詩は】沢山あったのだが、そればかり書き連ねていられようか、ということでも省略した。

【校異】*川 新田本「河」。*与隣 新田本なし。*恥叔 新田本なし。*彪外 新田本なし。*子淵 新田本なし。

【注】○その前の夜 三日の夜。三日の夜に川辺で送別の宴が催され、そこで詩の応酬があった。その後、名残り尽きぬ者五六人が川舟に同乗し、四日明け方に尼崎に上陸、そこでも酒宴を設けたと、第五段に見える。

（山陽駅路：詩）詩型は七言律詩、韻字（平水韻による）は鑣・朝・驕・遥・瑤（下平声蕭韻〔広韻：蕭・宵韻〕）。○駅路 宿駅のある街道。○征鑣 旅に出る馬。○分手 手を分かつ、別れる。○華川 浪花の川か。（桜の）花咲く川ともそれそうだが、その意味での用例は唐詩には無い。○綰柳 旅のはなむけに柳の枝を折って環状に結んで旅人に送る習慣が中国にあった。「綰」は、わがぬ（環に結ぶ）。○驕

馬「驄」は、青黒と白色と毛の混じった馬。○舞浜 舞子の浜の漢語表現。現在の神戸市垂水区にある白砂青松の風光明媚な浜。東は須磨、西は明石、明石海峡を隔てて淡路島に対する。○淡島 淡路島の漢語表現。○泉石 山石と流水、転じて山水の景色。○瓊瑤 美しい玉、転じて詩文の美的表現。○与隣 明和八年から九年に行われた『大日本史』筆写の協力者に「原与隣」が見え、同一人物と思われる。加地伸行編著『中井竹山・中井履軒』（明徳出版社）『叢書日本の思想家二四』（昭和五五年）巻末「関係人物表」参照。

《並轡群仙：詩》詩型は七言律詩、韻字（平水韻による）は帰・飛・肥・衣・違（上平声微韻）。○並轡 「轡」は手綱で、手綱を並べ連れ立って行くこと。○群仙 群れをなす仙人。博士・内記・学生ら一行を仙人に喩えたもの。○揚鞭 鞭を揚げて勢いよく馬を駆り立てる。○雲際 雲のかかる所。「群仙」と合わせて、俗塵を離れた一行の旅立ちを表現するのであろう。○紫驪 「驪」は黒栗毛の駿馬。○龍山 龍野の山々の漢語表現。○遊履 「履」は履物で、山野を歩き巡ること。○鶴水 鶴と加古との音の類似による加古川の漢語表現か。加古川は兵庫県中央部を流れて瀬戸内海に注ぐ、山陽道有数の河川。○垂綸 「綸」は釣り糸で、釣り糸を垂れること。○離席 送別の宴席。○窮飲 酒を酌み交わす喜びを存分に味わう。○巨爵 「爵」は盃で、大きな盃の意。○征衣 旅の衣。○千余里 大坂と龍野間は直線距離で百キロメートルに満たない。千余里は当然実数ではなく、相離れた心理的な遠さを言う。送別詩での使用例に、王維「送權二」の「恨むらくは別ること千余里、堂に臨み素琴を鳴らす」、同「送熊九赴任安陽」の「相去ること千余里、西園に明月同じ」などがある。○風光 両地達 「風光」は景色、眺め。「両地」とは、博士ら一行の遊ぶ龍

野への道中と友人たちが残された大坂とを指す。さほど隔たらぬ播磨と大坂ながら、両地の景色が余りに違って、大坂ですばらしい眺めが味わえないのが残念というのであろう。○恥叔 竹山・履軒の知人の字であるが、未詳。

《分手：詩》詩型は五言律詩、韻字（平水韻による）は窮・風・中・同（上平声東韻）。○壯遊 意気盛んな遊覧。○彪外 竹山の弟子の辻本氏、名は弼中、字は彪外。『真陰集（文集）』巻六「辻本生名字説」に見える。辻本氏に名・字を請われた竹山は、日頃好む『法言』君子篇の言葉「中に弼ちて外に彪る（弼中而彪外）」からとって与えた。字を与えたのは辻本氏の元服時、明和六年（一七六九）のこと。《真怪：詩》詩型は五言古詩、韻字（平水韻による）は雲・虎（上声麋韻）。○真怪 怪しむ莫れ、不思議に思うな。龍虎が活動すると風雲が起くという同類感応の考えは、例えば「雲は龍に従い、風は虎に従う」（『易』乾卦文言伝）、「虎嘯いて谷風至り、龍挙がりて景雲属く」（『淮南子』天文訓）などに見える。龍（博士・内記に比す）や虎（文章生に比す）の出發に風雨が起くるのは当然だということである。○平輿龍 平輿は地名（現在の河南省汝南郡）。後漢末の謝靈運が平輿の許虔・許邵の兄弟を見て「平輿の淵には二匹の龍がいる」と称えた故事による（『世説新語』賞譽篇）。ここでは博士・内記の兄弟を指す。○帶續虎 「續虎」は刺繡の虎。詩文の才に優れることを言う。ここでは詩文の相手にと連れた二人の文章生を指す。『世説新語補』賞譽篇上に「曹子建七步に章を成し、世目して繡虎と為す」と見え、曹植の文才を世間で「繡虎」と評した故事による。なお、履軒には『世説新語補』の注釈書『世説新語補雕題』がある。○子淵 懷德堂三代目学主であった三宅春楼の嗣子、名は光同、字は子淵、号は西海。履

軒の京都行の送別会での詩を集めた『懷德堂会餞詩卷』（明和三年、一七六六）に参会者として三宅子淵が見える。同一人物であろう。加地伸行編著『中井竹山・中井履軒』（明德出版社〈叢書日本の思想家二四〉、昭和五五年）巻末「関係人物表」、湯城吉信『懷德堂会餞詩卷』訳注『中国研究集刊』陽号（大阪大学中国学会編、二〇〇三年）参照。

《四》旅の君たちは、留別とて、

野生

抛却河梁離別情 河梁離別の情を抛却すれば、
無窮清興万山青 無窮の清興 万山青し。
狂夫自笑煙霞癖 狂夫は自笑す 煙霞の癖、
吟鞍不遠幾長亭 吟鞍遠しとせず 幾長亭。

源生

離堂一任夜冥々 離堂「一」に夜の冥々たるに任せ、
絳燭清尊聚德星 絳燭清尊に徳星聚まる。
領略溪山行樂好 溪山に行樂するの好しきを領略する
も、
未知双眼向誰青 未だ知らず 双眼 誰に向けて青くせん
かを。

博士

春酒卜良会 春酒もて良会を卜し、
送吾西播行 吾の西播に行くを送る。
衣衝海氣潤 衣は海氣を衝いて潤い、
馬蹴澗花輕 馬は澗花を蹴って輕し。
到处皆親旧 到る処 皆親旧、
相隨是弟兄 相隨うは是れ弟兄。
無端賦采葛 端無くも 采葛を賦せば、
忽覺別魂驚 忽として覺る 別魂の驚くを。

内記はるゑひふして、つくらずありけるが、ふしながら、はるかに西のかたをながめやりて、

三か月に いざ引つれて あづさ弓
ゐる山のはに あすはねるらん*

【現代語訳】 旅に出る方々は見送る友に書き残す詩として、

野生

「蘇武が李陵とが橋のたもとで別れを告げた、そんな」離別の辛さを打ち捨てて「旅路につけば」、旅の感興は尽きることなく、どの山々も青く連なる。
旅行狂いのこの俺だが、山水を楽しむ癖には我ながらあきれてしまふ。鞍上に詩を吟じて行けば、幾十里もの街道もちつとも遠く

は思われぬ。

源生

餞別の宴は夜の深々と更けるに任せ、赤々と燃える灯火と澄んだ酒を満たした樽とに賢者らが寄り集う。

道中の谷や山は楽しむのに絶好の場所とは心得ているが、私の二つの目玉、いったい誰にむけて青眼を見せたものやら。

博士

良き日を選び集まって春の新酒を酌み交わし、我らが西の方播磨へ行くのを見送ってくれる。

旅衣は海の氣に当ってしっとり潤い、馬は谷川の花を蹴って軽快に進み行く。

到るところで出会うのはみな親類や古馴染み、連れ立ってゆくのは兄弟。

「何の憂いもなかったが」はからずも「〔采葛〕の如き」別離の詩を詠もうとするや、突然友と別れる悲しみが心を動かした。

内記は酔い臥して漢詩を作らずにいたが、寝転びながら、はるか遠くの西方を眺めて、「次のように歌を詠んだ。」

三月月に、さあ引き連れられて、「引く梓弓を射るではないが」三日月の入る「西方の」山の端に、明日は寝ることだろうなあ。

【校異】*癖 新田本「僻」。*ねるらん 新田本「ぬらん」。

【注】○留別 旅立つ人が見送る友人に詩文を書き残すこと。

《抛却河梁…詩》詩型は七言絶句、韻字（平水韻）は情・青・亭（庚・青韻）。厳密には情と青・亭とは韻目が異なり、この点を重く見れば古詩となる。○抛却 打ち捨てて。○河梁 川に架けた橋。前漢の

時代、ともに匈奴に捕らわれの身であった李陵と蘇武であったが、蘇武は漢への帰還を許された。李陵は別れに臨んで「手を携えて河梁に上り、游子 暮に何くにか之く」という詩を送り、これに因んで「河梁」

は送別の地をも意味する。○清興 俗を離れた風雅な楽しみ。○狂夫 自分の思うまま勝手気ままに生きる人。杜甫の詩「狂夫」に、貧しい暮らしを自嘲して「自ら笑う狂夫 老いて更に狂」と見える。杜甫

は自分の人並みでない性癖・生き方を「狂」と称した。ここでは、そのような深刻な意味ではなく、山水を楽しむ性癖を持つ者の自称。○煙霞 山水に立ち込める雲や霞、また山水の景色。○長亭 十里ごとに設置された宿駅。

《離堂一任…詩》詩型は七言絶句、韻字（平水韻による）は、冥・星・青（下平声青韻）。○離堂 送別の宴席。○一任 「一」は専ら、

すつかりの意で、すつかり任せること。○冥々 暗いさま。○絳燭 「絳」は赤い色で、赤々と燃える灯火。○清尊 「尊」は酒を容れる樽。○聚德星 「德星」は吉祥とされる星。後漢の陳寔が子や甥を連れて荀淑のところへ出向いた際、天に德星が聚まったので、それを観

測した太史が「五百里内に賢人の聚ること有り」と報告した『世説新語』德行篇の劉孝標注所収『統晉陽秋』。このことから、賢人が聚まり集うことを意味する。○領略 会得する、味わう。訳では領略する対象を一句全体に掛けたが、「溪山」のみに掛けて「溪山を領略して行楽好し（溪山を味わえて結構な行楽だ）」とも解釈できる。○双

眼向誰青 青眼は、気持ちの通じ合う者に対して見せる目つき。阮籍

は礼教に拘泥する俗人には白眼を向け、心の通じる脱俗の人物には青眼を見せたということから『晋書』阮籍伝)。ここでは、大坂の友人たちと別れた後は、いったい己の両つの青眼を誰に見せればよいのか、君たちほど心の通じる人々は期待できぬ、という意味。

〔春酒：詩〕詩型は五言律詩、韻字（平水韻による）は行・輕・兄・驚（下平声庚韻）。○無端 はしくも、はからずも。○采葛 『詩經』王風「采葛」。その一節に「彼采葛兮、一日不見、如三月兮」とあるように離別の辛さを詠む詩。ここでは友人との別れを惜しんで作る別離の詩を、「采葛」になぞらえているのであろう。○別魂 離別に際しての悲しい気持ち。

〔三か月に：歌〕○三か月 陰暦で毎月の第三夜過ぎころに出る、細い草刈り鎌の形をした月。○あづさ弓 梓の木でできた弓で、「射る」「引く」「張る」などの語にかかる枕詞。ここでは「（弓を）射る」にかけて直後の「ある」を導く。すぐ下の「ある」は「入る」の意であろうから、正しくは「いる」とすべきものであろう。また「あづさ弓」とすぐ上の「引く」とは縁語でもある。

《五》舟いづるころ、なをあかずとて、五六人ばかり、したひきてのりぬ。いとせばきふねに、おしこりて、身じろぎもせで、あけがたに、尼が崎にあらりぬ。また酒のみなどして、出たゝんとするに、よべないきのつくらずなりぬるを、ほいなきことゝ、人々にせめられて、石筆といふものをとり出て、まきのおくにかいつく。

江水三十里

感歎相送意

離酒復互斟

征馬再三嘶

去々浹辰別

何事勞愁思

從是春物好

名勝到处開

連山肩上聳

蒼海掌中視

奚囊待我發

神遊使君娛

唯恐奇絕境

塵筆不得寫

江水三十里

感歎す相い送る意に。

離酒復た互いに斟み、

征馬再三嘶く。

去々浹辰の別れ、

何事か愁思を勞す。

是れより春物好く、

名勝到處開く。

連山肩上に聳え、

蒼海掌中に視ゆ。

奚囊我が發くを待ち、

神遊君をして娛しましむ。

唯だ恐る奇絶の境を、

塵筆写すを得ざるを。

【現代語訳】舟が出る頃、まだ名残惜しいといって、五六人ほどが後を追って来て舟に乗った。とても狭い舟に無理に乗り込んで身動きもせず、明け方に尼崎に上陸した。そこでもまた酒盛りなどして旅立とうとすると、昨夜は内記が漢詩を作らずじまいであったのを、それではだめだと、人々に責められて、「仕方なく内記は」石筆というものを取り出して、「昨夜来、応酬された漢詩を記した」冊子の末尾に書き付けた。

三十里の旅出に臨み、送別の心に感激する。

互いに別れの酒を酌み交わすと、馬はしきりに嘶く。

去れ、十二日ほどの別れに愁いなど必要ない。

これから春は酣で、至る所名勝だ。

連山は肩のすぐ上に聳え、青い海は目と鼻の先に見える。

詩を入れる袋は私に開かれるのを待っている、すばらしい遊びが君を楽しませる。

ただ心配なのは、世俗にまみれた私の筆で、絶境を描写することができないことだけだ。

【校異】*ないき 新田本「内記」。*出て 新田本「いて(で)て」。

【注】○おしこる 「押し凝る」。無理に押し入って固まる。○ほいなき 「本意無き」。本来の意向、期待と違って不満である。○石筆 黒色あるいは赤色の粘土を筆の先に取り付けた筆記具。○まきのおく 「まき」は書画の巻物あるいは冊子。「おく」は末尾。

〈江水三十里…詩〉○江水三十里 「江水」は長江のこと。明の袁凱の詩に「江水三千里」という句がある。履軒は龍野行の行程に合わせ「三十里」としている。○淡辰 十二支一巡り、即ち十二日間。○奚囊 詩文を入れる袋。

《六》たちわかれゆくほど、ひなのすまゐの、めなれずめづらかなるに、山や河やとながめわたり、散のこる桜の処々に

みゆるも、わざとならずおかし。かぶと山のみゆるほど、はかせ源生をよびて、さしおしへつゝ、「あの山なん、そのの遠つおやの、君のおんために、屍をさらしたる処ぞ。しらずやある」とのたまひければ、としわかくて、さだかには聞もさだめざりしを、かくと聞て、うち涙ぐみて、

松たかみ嶺のあらしの音にのみ

むかしのと聞ぞ悲しき

西の宮といふ処をすぎて、青海原を見わたして、博士馬の上にて、

征驂出尽西宮駅 征驂^き出尽す西宮の駅、

海色蒼茫樹上開 海色 蒼茫として樹上に開く。

と口ずさみて、野生をかへりみて、「この上をつけよ」とのたまへば、とりあへず、

花暗川原細雨来 花暗く川原に細雨来たり、

已洗城中満面埃 已に洗う城中満面の埃を。

「ないきはいかにみたるぞ」とあれば、

風はやみ 青海原にちる帆影

小田にとびかふ驚かとぞみる

【現代語訳】別れて行くうちに、鄙びた住まいが、見慣れず珍しげで、山や河やと眺め通し、散り残った桜が所々に見えるのも、わざとらしくなく趣がある。六甲山が見える頃、博士は源生を呼んで、指さし教えながら、「あの山こそが、お前の祖先が、主君のために屍をさらした所だ。知らないか」とおっしゃると、年が若くて、はっきりとは聞いたことはなかったが、こうだと聞いて、涙ぐんで、「次のように歌に詠んだ。」

松が高いので、峰に嵐の音が聞こえる。その音ではないが評判にだけ、昔の跡と聞くのが悲しい。

西宮という所を過ぎて、青海原を見渡して、博士は馬の上で、

馬は西宮の宿場を離れ、海は青々として木々の間に広がっている。

と「漢詩の後半を」口ずさんで、野生を振り返って、「この上をつけよ」とおっしゃったので、とりあえず、「野生は次のようにつけた。」

花は暗く、河原にこぬか雨が降り、町で汚れた満面の塵を洗ってくる。

「内記はどう見るか」とあったので、「内記は次のように和歌に詠んだ。」

風が速いので、青海原に散らばる帆影が、田んぼに飛び交う鷺か
と見える。

【校異】*散のこる 新田本「ちりのこる」。*処々 新田本「所々」。

*遠つおや 新田本「遠つ親」。*とし 新田本「年」。*聞ぞ 新田本「きくそ(ぞ)」。*博士 新田本「はかせ」。*口 新田本「くち」。
*みたる 新田本「見たる」。

【注】○かぶと山 六甲山の東端に甲山かぶとやまという山があるが、ここでは六甲山を指すと思われる。六甲山の名前の由来として、継母の神功皇后に謀反を企てた驥坂王むじまののみことその家来五人が首を刎ねられその六つの兜首(兜を被ったままの首)を埋めたから六甲山というようになったという話がある。この由来説は、懷徳堂出身者である中井藍江が絵を描いた『播州名所巡覧絵図』(享和三年(一八〇三))にも見え、江戸時代に広まっていた説だと思われる(他、『摂陽群談』元禄十四年(一七〇一)、『摂津志』享保二十年(一七三五)、『大阪繁昌記』明治十年、巻二)。「昔の旅」で源生は葬られた家来の子孫だということになっているのであろう。ただし、神功皇后の話(記紀にあり)は四世紀頃のものであり、一方、六甲山の名が文献に登場するのは貝原益軒の「有馬温泉記」(寛永八年(一六三二))など江戸時代からだと言われる。六甲山は、奈良平安時代には「牟古山」「六児山」などと表記され、「むこやま」と呼ばれたと思われる(現在の「武庫」に当たる)。「むこ」の意味は諸説あるが、大阪方面から「向こうに見える」というのが有力である。後に、この「むこ」に漢字の「六甲」が当てられ、「ろっこう」と音読みされ、先の伝説が当てられたと考えるべきであろう。ちなみに、地名の訓読みが音読みに変わるのは、「ふたら」に「日光」が当てられ「につこう」と呼ばれるようになったように例が多い。

〈征驛出尽…時〉○征驛「驛」はそえ馬。

《七》「布引の滝は、都遠からぬを、いまだ見ざることよ、いざ」といふほど、空かきくもり、雨ふり出たり。馬も通はぬ山路をわけなんこと、いとかたしや。さはれ、「思ひたちたることを、やみなんや」とて、はかせを始めとして、簀すがたにて、山の細道をたどりゆくに、雨もいたくはふらずなりぬ。滝ちかくなるまに、山のはらに、家みきらゝかにみゆ。しろきついひぢ、瓦ぶきのくら、水碓の屋など、思ひかけぬさまは、かの桃の源にやとおどろく。からうじていきつきたり。げにふかくわけたる、山のかひありて、聞しにすぎて、見処おほかり。

はかせ

布引のたきのしら玉ながめこし

よゝのことばの数にとらまし

ないき

雲井より落くる滝のしら玉は

天の河原のさざれ石かも

野生

山姫のそらにさらすと音に聞て

いまこそきつれ布びきの滝

花あるころなれば、ゆきかふ人ら、さしもなき宮寺、あるは

里人のつくり出たる、何くれと名所めくあたり、処せくつどひたりや。この滝は、まことに見どころありて、歌にもふるくより読たるを、「この人々の外には、また誰かはきたる、あさまし」とおぼひて、内記、

花にほふ日影にさらす布引の

滝つ心をわれこそはくめ

【現代語訳】「布引の滝は、都から遠くないのに、まだ見ていないことだ。さあ「行こう」と言った時、空はかき曇り、雨が降り出した。馬も通れない山路を分け入ることは非常に難しい。そうではあるが、「思い立ったことを止められようか」と、博士をはじめとして、簀姿で山の細道をたどりゆくと、雨もひどくは降らなくなった。滝が近くなるにしたがつて、山腹に、家の様子が立派に見えた。白い築地、瓦葺きの蔵、水車小屋など、思いがけない様子は、あの桃源郷ではないかと驚く。からうじてたどり着いた。誠に深く分かれた山の峡谷があり、聞きしにまさり見所が多かった。「それぞれ次のように歌に詠んだ。」

博士

布引の滝の水しぶきを、これまで詠われてきた代々の言葉の数だけ取ろう。

内記

雲の彼方から落ちてくる白玉は、天の河原のさざれ石かもしれない

い。

野生

山の神が空に曝したと噂に聞いていたが、今こそやつて来た、その布引の滝に。

花の咲いている季節なので、行き交う人々は、大したことのない社寺、あるいは里人の作り出した、何やかやと名所っぽい辺りに、所狭しと集まっている。この滝は本当に見所があり、和歌にも古くから詠まれているが、「この人々の外には、また誰が来ただろうか、嘆かわしいことだ」と思えて、内記は「次のように歌に詠んだ。」

花が咲き、日光にさらされている布引の滝の、高ぶる心を私こそが汲み取ろう。

【校異】 *出たり 新田本「いて(で)たり」。*さはれ 小天地閣本「さばれ」。*思ひ 新田本「おもひ」。*細道 新田本「ほそ道」。*思ひ 新田本「おもひ」。*布引 新田本「布ひ(び)き」。*よ、新田本「世々」。*落くる 新田本「おちくる」。*山姫 新田本「山ひめ」。*ゆきかふ 中之島本「ゆきこふ」。*見どころ 新田本「みと(ど)ころ」。*読たる 新田本「よみたる」。*おぼひて 小天地閣本は見せ消ちにし、朱筆で「おぼえて」に改める。*滝つ 新田本「たぎつ」。

【注】○布引の滝 六甲山にある滝。古来、歌枕として有名で、「天の川これや流れの末ならむ空より落つる布引の滝」(『金葉和歌集』雑上、読み人知らず)や「ひさかたの天つ乙女が夏衣雲ゐにさらす布引

の滝」(『新古今和歌集』雑中、藤原有家)などの歌が残されている。『伊勢物語』八十七段にも見える。○水碓 「みずうす」。水車を動力として穀物をひくことなどに用いた臼。

〈布引の：歌〉○よゝのことは 布引の滝を詠った歌が多いことを言うのである。上記、「布引の滝」注参照。

〈山姫の：歌〉○山姫のそらにさらす 『古今和歌集』に「裁ち縫はぬ衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらん」(雑上、伊勢)という歌がある。

〈花にほふ：歌〉○滝つ心 「滝つ」は「たぎる」の意。ちなみに、『万葉集』に「嘆きせば人知りぬべみ山川の激つ心を塞かへてあるかも」(譬喩)という歌がある。なお、「滝」と「たぎつ」は語源を同じくする。○くめ 「汲め」。滝の縁語。

《八》湊川に、楠中將のつかあり。源生、

ほそ道にぬれそぼちつゝ たづねこし

昔しのぶの草の露けさ

内記はことに涙おとして、

日にかざす 南の枝の かれしより

世はとこやみとなりまさりつゝ

野生もかくなん、*

落かゝる 日をかへしけむ 玉ぼこの

道ふみならし とふ人のなき

博士は文つくり、墓祭^{*}し給ふけれど、わづらはしければかゝず。こよひは福原にとまる。かの平相国が、民のわづらひをもちへりみず、きづき出したるあたりなり。こゝにあひし^{*}れる人あり、とひきて物がたりす。

【現代語訳】湊川に、楠正成の墓があった。源生は、「次のように歌に詠んだ。」

細道を濡れながら訪ねて来ると、昔をしのぶというしのぶ草が露に濡れている。

内記は特に涙を流して、「次のように歌に詠んだ。」

日光にかざす南の枝が枯れてから、世の中はますます真つ暗闇になつてしまった。

野生もこのように、「歌に詠んだ。」

【清盛が】落日を招き戻したという道を、今は踏みしめて訪れる人もない。

博士は漢文を作り、墓参されたが、煩わしいので書かない。この夜は福原に泊まった。あの平清盛が人民の労苦をも顧みずに「都を」築いた辺りである。ここに知り合いがおり、訪ねてきて雑談した。

【校異】*つか 新田本「塚」。*かくなん 新田本「かくなむ」。*落かゝる 新田本「おちかゝる」。*かへしけむ 新田本「かへしけん」。*祭 新田本「まつり」。*あひ 新田本「相」。*あり 新田本「ありける」。

【注】○湊川 楠正成が足利尊氏との戦いに敗れ自害した場所。

〈ほそ道に…歌〉○露けさ 露は涙を暗示する。『新古今和歌集』に「たちばなの花ちる軒のしのぶ草昔をかけて露ぞこぼるる」(夏、前大納言忠良)という歌がある。

〈ほそ道に…歌〉○南の枝 楠正成を喩える。『太平記』卷三に、後醍醐天皇が、笠置の行在所で、南の枝が伸びた木の夢を見て、楠を暗示するものだとし、楠正成を求めるといふ話がある。

〈落かかる…歌〉○日をかへしけむ 平清盛が、大輪田泊の改修工事を進捗させるべく、沈みかけていた太陽を招き返したという俗説を踏まえる。○福原 平清盛が新都を建設した所。

○平相国 平清盛のこと。

《九》五日には、つとめて出て、名にしおふ須磨の浦をながめわたるに、空くもりて、島の面影おぼつかなきほどなれど、海の面のうらくと青みわたりたるは、常よりもまさりてみゆ。誰にか、

淡路島 あはと見わたす みるめさへ

霞こめたる春の海つら

かのあひしれるが子、酒くだものなど、さづけさせてこゝまで送りきにける。浜辺におりゐて、さけのみ、かれゐくひなどず。月あるころならば、こゝにくらして、夜とともにながめたまふらんを、くちおしきや。

今やうの「須磨組」といふものに「さらしな月とともに、ながめあかさん」とうたふは、いかにぞや。このすまの浦で、まことにならぶかたなきを、まほならず、かくいひけちたる、いとくちおしきや。さらばいかでよからん。内記に「引なをせ」といひければ、「すまといふも浦の名、あかしといふも浦の名、月もまるやのすまゐに、あかしかねたるうら人、かくもや」とてうたひければ、みな人けうじあへり。

【現代語訳】五日には、早朝に出発して、有名な須磨の浦を眺めながら行ったところ、空は曇つて、島の輪郭さえはつきりわからない程であったが、海面がうらかに青く広がっている様子は、いつもより美しく見えた。誰かが、「次のように歌に詠んだ。」

淡路島「あれは」と淡く見わたす「海松布ならぬ」見る目さえも霞に込められた春の海面

あの旧知の人が、酒や肴などを捧げさせて、こゝまで送ってくれた。浜辺におりて、酒のみ弁当を食べた。月のある時分であれば、こゝにとどまって夜とともに「月を」眺めたであらうものを、残念である。

筆曲の「須磨組」という曲に「明石の月と須磨の月を、信濃更級の月とならべて」、「さらしな月ともにながめあかさん」と歌っているのは、いかながなものであろうか。この須磨の浦「の月」こそ、まことに並ぶものがないのに、不十分にも、このように（更級の月ごときと同列かのように）けなししているのは残念である。ならば、どうして「このままで」よからうか。内記に「作り直せ」と言つたところ、『須磨』というのも海岸の名、『明石』というのも海岸の名である。月も丸く、丸屋（粗末な住居）の住居で夜を明かしかねている浦人は、このようであらうか。」と詠んだので、皆が面白がつた。

【校異】*須磨組 新田本「須磨組」。*くちおしきや 新田本「くちおしきわざや」。*引なをせ 新田本「ひきなをせ」。

【注】〈淡路島…歌〉○淡路島 瀬戸内海東部の島。須磨海岸の対岸にある。○あは 「あは（あれは）」と「淡」とを掛ける。○みるめ 「見る目（遭う機会）」と「海松布（ミル科の海藻）」とを掛ける。

『新古今和歌集』雑上に凡河内躬恒の歌として「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵は心からかも」とある。これを踏まえて、『源氏物語』第十三帖「明石」に、光源氏の歌として「あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月」（「あれは」と「海を隔てて」）淡く見える淡路島の情趣さえ残す影もない、あかるく澄んだ夜の月」とある。また同じく第十八帖「松風」に、光源氏の歌として「めぐり来て手に取るばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月」（近づいて手に取れそうなほどはつきり見える、淡路島の、淡く見える月）とある。

○さらしな月とともにながめあかさん 八橋検校（二六一四〜一六八五）の箏曲組歌のうち「須磨」の第一唄に「須磨といふも浦の名明石といふも浦の名 更科の月ともに眺めていざや明かさん」とあり、同じく第五唄に「三五夜中の新月 隈なきぞおもしろや 千里の外の人までもさぞや眺め明かさん」とある。履軒はこれらを引用したものである。○まろや 月の「丸さ」と「丸屋」（粗末な小屋）とを掛ける。○すま 「須磨」と「すまゐ」とを掛ける。○あかし 「明石」と「明かし」とを掛ける。なお、『古今和歌集』に「読み人知らず」として、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」とあり、或説として人麻呂の歌とする。これを踏まえたと思われる落語「和歌三神」に「ほのぼのとあかしかねたる冬の夜にちぢみちぢみて人丸くねる」とある。また『源氏物語』第十三帖「明石」に「旅ごろもうらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすはず」とある。

《一〇》岸のかたの屋に、里人あつまりて、酒のみゐるたるに、内記この歌をかいつけてやりける。「これなんやんごとなきあたりにて、けうぜさせ給ふぞ、うたひて酒すゝめよ」といひければ、里人らよろこびまどひて、みなくこゝにきてぬかをつく。「あやし^{*}の山がつの、処けがしにさぶらふ。やまと歌などは、聞もおよばず。さるは今やうのひとふしも、処の名のいりたるを、あき人のたよりに、都にあるかぎり、ならひ伝へて、心やりにしけるを、いまおしへ給へることばな

ん、ことにめでたきを、いまだしりさぶらはず。このかしこまりに、おまへにぬかをつくなり。よくもぞ都人のめぐりあひたまへるかな。人まろの明神のおんめぐみなるべし」とぞ。むかしもいまも、ひな人はすくよかにまめなりかし。ないきはたへず、はしり出て、松陰にわらひたふれて、しぬべくありける。さてぞしれるが子にわかれてゆく。

【現代語訳】 岸辺の家屋に里人が集まって酒を飲んでいたところに、内記がこの歌（「須磨組」の改作）を書き付けて贈った。「ふざけて」「これは、高貴な方々のところで楽しまれた歌であるぞ、詠じて酒を重ねよ。」と言ったところ、里人らは喜びあわて、皆こちらへ来て、額を地につけて拝んだ。「村人らが言うには」「賤しい山人の処けがしでございます。和歌などは聞き及ぶことがあります。そうではあります。が、箏曲の一節も「この」処の名の入っているのを、商人の口伝てに、都にあるかぎりを習い伝えて、心の慰みにしておりましたが、いま教えていただいた歌詞こそ、とりわけ立派であるのに、これまで知りませんでした。そのお礼に、御前に額をつけております。よくも都人に巡り会うことができたものです。〔柿本〕人麻呂の明神の御恵みでありますよう。」ということである。昔も今も、田舎者は素直で生真面目である。内記は堪えきれずに走り出て、松の木陰で笑い転げ、死にそうになっていた。さて、旧知の人に別れて出発した。

【校異】 *あやし 小天地閣本「ああやし」。*むかしも 新田本「昔も」。

【注】○人まろの明神 享保九年（一七三三）、朝廷から「明石人丸神社」に対して正一位が贈られ、祭神を「柿本大明神」、社号を「柿本社」とするとの宣命が下された。現在、明石市人丸町に柿本神社がある。なお人麻呂の神格化は、平安後期以降、住吉明神や玉津島明神との習合によって進行したとされる。

《一一》内記のいときなきより、この道はふみならしてしを、十年ばかむ見ずなりにける。舞子浜といふ処にて、松の緑の、昔にかはらず、めでたきをみて、

あさみどり 松はいろそふ 春雨の

ふり行われぞ わびしかりける

なをゆきゆけば、あかしの浦となん。すべてこのあたりは、あやしの浦人のすまゐなるに、みすめく竹すだれかけわたしたり。むかしより、さすらへびとのおほくすみつきたる、そのなごりとぞ、人のいふなる、げにめづらかなるさましたるものかな。いまもさは、よしある人の、かくぞ一処にもあるらん、いかにおもふ人のこひしかるらんなど、あやなくあはれび、おしはかり給ひて、

なきくらし おきてあかしの 浦人は

みるめをなみに しほたれぬらん

まさなき心あてなるや。

【現代語訳】内記は幼い時からこの道は踏み慣れていたのだが、ここ十年ほどは見えていなかった。舞子の浜という所で、松の緑が昔と変わらず立派であるのを見て、「次のように歌に詠んだ。」

浅緑色の松に色を加えて春雨が降のを見ると、「変わらぬ松に比べて」 齢を重ねた自分がわびしく思われる。

さらに行くと、明石の浦であつた。総じてこのあたりは、賤しい浦人の住居であるのに、御簾のような竹すだれをかけたわたりしている。昔から、都から配流された人が多く住み着いてきた、そのなごりだと人はいうようだが、実際に珍しい様子をしているものよ。いまも多く、由緒ある人が、このように一所にとどまっているのだらう、どれほど恋人が恋しいことかなどと、無性に心打たれて、「流人の心を」推し量つて、「歌に詠んだ。」

泣き暮らし「眠れずに」起きて夜を明かす明石の浦人は、「海松布を波に濡らすように」 見る目を涙で濡らしていたであらう。

〔これは〕 的外れの推量であらうか。

【校異】 *舞子浜 小天地閣本「舞子の浜」。*緑の昔に 新田本「緑昔に」。*むかしより 新田本「昔より」。*さすらへびと 新田本・小天地閣本「さすらへ人」。*いかに 小天地閣本「いかにも」。

【注】「あさみどり…歌」○ふり行われぞ 雨が「降る」と年月が「経る」とを掛ける。

「なきくらし…歌」○おきてあかし 『後拾遺和歌集』に伊勢大輔の歌として、「おきあかし見つつながむる萩の上の露吹き乱る秋の夜の風」とある。『新古今和歌集』に俊成の歌として、「あまのかるみるめをなみにまがへつゝなぐさのはまをたづねわびぬる」とある。「あかし」は第九段注を参照。○みるめ 第九段注を参照。○なみ 「波」と「涙」とを掛ける。○しほたれ 「海水が滴る」と「涙で濡れる」とを掛ける。

《一二》この夜は、かこ河という処に、やどりもとめて、枕とりよせて、足をすみさまにやりて、かしらばかり、ひと処によせて、うちかたらふに、かの里人のなごり*おぼえて、なをわらひあへる。「今やうのこと葉は、わづらはしけれど、心のどかなるふしくあるものなり。これをからうたの文字にうつしたらんは、いかならん」といふ。野生「こゝろみに」とて、「飛鳥川」を、

決彼飛鳥之源 彼の飛鳥の源を決し、
注此研石之淵 此の研石の淵に注ぐ。
愁腸兮写不尽 愁腸 写して尽くさず、
微命兮不期昏 微命 昏を期せず。

「墨田川」を、源生、

離故土兮遠来 故土を離れ 遠く来り、
暮度兮墨之水 暮に度る 墨の水。
眇京鳥兮借問 京鳥を眇て 借問す、
生死兮我所思 「生けるや死せるや 我が思う所は」と。

はかせうち聞て、「われも」とて、

珠浦秋風兮 珠の浦 秋の風
波涛撼枕兮 波涛 枕を撼かす
藉袖袂兮我独臥 袖袂を藉きて 我独り臥ぬ
夢不成兮夜又夜 夢成らず 夜又た夜

これは「心づくし」なりけんかし。かくいひくゝて、ねにける。内記はなにやらんうめきたまひけるがまゝに、いびきとなりぬ。

【現代語訳】この夜（三月五日の夜）は、加古川という所に宿を求め、枕をとりよせて、足を隅のほうへやり、頭だけを一箇所に寄せて話合うに、かの里人のことを思い出し、さらに笑いあつた。「箏曲の歌詞は、複雑だが、心が落ち着いてのんびりする所もあるものである。これを漢詩の文字に訳してみるのはどうだろう」と言つた。野生が「ためしに」と言つて、「飛鳥川」を、「次のように漢詩に訳した。」

あの飛鳥の源より溢れ出て、この硯の淵に注ぐ。悲しい心は描写し尽くせない。幸薄き命は夕暮れまであるかどうかわからない。

「墨田川」を、源生は、「次のように漢詩に訳した。」

故郷を離れて遠くまで来、夕べに隅田川を渡ろうとした。「たまたま」都鳥を見て問いかける、「生きているのだろうか死んでいるのだろうか、私が愛する人は」と。

博士が「これらを」うちききて、「自分も「作ろう」と言って、

須磨の浦に秋の風。波濤が枕をうごかす。衣を敷物として私は独り寝る。夢をみることもない、夜また夜。

これは「心づくし」だったのだろうか。このように言いあいながら、寝てしまった。内記はなにやら呻いていたが、そのままイビキとなった。

【校異】*なごり 新田本「名ごり」。*京鳥 小天地閣本「京馬」。

【注】○かこ河 今の兵庫県加古川市。○飛鳥川 八橋検校（第九段「さらしな月」注参照）の箏組曲「心づくし」の第五歌「飛鳥川の水上を硯の水に堰入れて書く言の葉は尽きまじや今日も暮さん命かな」を指す。歌詞は『古今和歌集』の「あすかがはふちはせになるよなりとも思ひそめてむ人はわすれじ」（よみ人しらず、巻十四恋歌四）、『新勅撰集』の「四方の海を硯の水に尽くすとも我思ふこと書きもやられじ」（皇太后宮大夫俊成、雑）を踏む。下に見える「隅田川」「心

づくし」もこの箏曲の歌詞。平野健二『三味線と箏の組歌』（白水社、

一九七八年）参照。○研石 硯のことで、深い淵を喩えている。○隅

田川 箏組曲「心づくし」（前出「飛鳥川」注参照）の第二歌「故郷をはるばると隔ててここに隅田川都鳥に言問はん君はありやなしやと」を指す。歌詞は『古今和歌集』（業平朝臣、巻九羈旅）の「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」を踏む。なお『古今集』の詞書に以下のようにある。「武蔵国と下総国との中

にある隅田川のほとりにいたりて、都のいと恋しうおぼえければ、しばし川のほとりにおりゐて（中略）さる折りに、白き鳥、嘴と脚と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。渡守に『これは何鳥ぞ』と問ひければ、『これなむ都鳥』と言ひける

を聞きてよめる。」○心づくし 箏組曲「心づくし」（前出「飛鳥川」注参照）の第二歌「心尽しの秋風に須磨の波枕衣片敷に独り寝に夢も結ばぬ夜な夜な」を指す。歌詞は『源氏物語』須磨巻「須磨にはいとど心づくしの秋風に……」、『金葉集』の「思ひやれ須磨のうらみて寝たる夜の片敷く袖にかかる涙を」（太宰大貳長吏）を踏む。

《一三》六日の暮つかたにぞ、いばの湊にはつきたれ。かのおきな、いつしかといざり出て、ひさしくあひ見ざりつるおぼつかなさなど、聞えつゞけ、よろこばひたまひたる。ことばりにぞ。このはかせの父は、この国より出て、朝につかへたまひたるなれば、うちとのしぞく、たゞこゝもとにのみありて、よるひる、おほくいきりき、つどひたり。おとななどは、

ねびすぎ、老まさるもあれど、めかへして驚ろくばかりはあらねど、むかしみし児どもの、こよなうとこのほりて、ものはちがましげなるをんな、おとしきおとことなりて、うちなみゐたる。「名のらずては、誰とやはしらん」と、いひさはぎたまへるも、わがかしらにふりけるゆきはしらずかし。

【現代語訳】六日の暮れごろには、揖保の湊に着いた。あの「博士に手紙を寄こした」翁が、さっそく這い出てきて、久しく見なくて気がかり「であったとのこと」など、「博士に」申し上げ、お喜びになつた。「それも」当然である。この博士の父親は、この国出身で朝廷にお仕えになつたため、内外の親族は、ここだけにいるので、夜昼「限らず」多くやつて来て、集まつた。大人などは、年老いて、老けたものもあるけれど、見直して驚くほどではないのだが、昔見た子供達は大変成長して、恥ずかしげな様子の女性、雄々しい男性になつて並んでいる。「博士は」「名乗らなければ誰かは分からない」、などと言つて騒いでいらつしやつたが、自分の頭に降り積もつた雪（のような白髪）のことは知らないであらう。

【校異】*あひ 新田本「相」。*驚ろく 小天地閣本「驚く」、新田本「おと（ど）ろく」。*あらねど 新田本「あらぬを」。*ふりける 小天地閣本・新田本「ふりかかる」。

《一四》見もしらぬをうなの、老たる翁の手をひき、をんな

子にまな酒さづけさせて、「都のかたのまろうどにたてまつらん」とて、しきりにぬかをつくあり。「何者ぞ」ととふに、よしとて、舅姑にけうふかきものにぞありける。いやしき馬ひきのめなるが、おつとうせしより、世わたるわざなく、いやましにまどしかりけるを、このをうな、おりぬひやとわれわざして、舅姑をはぐみ、朝夕よくつかへまつり、つゆ心にたがふことなし。ちかきわたりの人、あはれがりなげきけるを、このはかせ、いたうものめでする人にて、さいつころ、都にて聞つけて、おのれはさらにもいはず、友人らをかたらひて、しろがね、こがね、ぬのなど、そくばくおくり給ひける。そのかしこまりまうすなり。はかせ盃とり出て、なをことのよし、たづねなどして、かへしぬ。このむすめも、母に似て、けうある者とぞ。

【現代語訳】見もしらぬ媼で、老いた翁の手を引いて、女の子に着と酒とを差し出させて「都の方の客人に奉ろう」と（言つて）、しきりに頼づく者がいた。「何者だ」と問うと、よしという、舅姑に孝の深い者であつた。賤しい馬引きの妻だつたが、夫が死んでから、世渡りの仕事は無く、ますます貧しくなつたのを、この媼、機織りや縫い物の雇われ仕事をして舅姑を養い、朝夕よくお仕え申し上げ、全く舅姑の心に違ふことは無かつた。近くの辺りの人が、衰れがつて嘆いていたのを、この博士は感動しやすい人なので、先頃都で「このことを」聞きつけて、自分はもちろんのこと、友人らとも相談して、銀・金・

布など、たくさんお送りになった。そのお礼を申し上げるのであった。博士は杯をとり出して、また事情を尋ねたりして帰した。この娘も母に似て、孝行者だということだ。

【校異】 *老たる翁 手稿本は「老の翁」の「の」を見せ消ちにして右横に「たる」と記す。小天地閣本・中之島本・新田本「老たる翁」。

*何者 新田本「何もの」。*めなるが 小天地閣本「めなるか」。*おりぬひやとわれわざして 小天地閣本「おりぬひ」なし。*あはれがり 手稿本「あはれがりて」「て」を見せ消ち。小天地閣本「あはれがりて」、中之島本・新田本「て」なし。*いたう 小天地閣本「いと」「と」を「た」に見せ消ち。*給ひ 小天地閣本「たまひ」。*盃とり出て 小天地閣本は「盃」を「さかすき」「す」を見せ消ちにして「づ」。中之島本は「と」を「を」に作り横に「と」と附す。*者 小天地閣本・新田本「もの」。

【注】○よし 人名。『孝義録』卷之三「播磨国」に、「孝行者 同領（脇坂淡路守領内）龍野城下横町分下夕町 町人馬持忠兵衛倅市兵衛後家 よし 四十六歳 明和七年 褒美」とある。また、股野玉川『孝婦鳴盛編』にその行状が記されている。

《二五》十一日、ぞくの墓おがみにとてゆく。博士のあねなる、妹なる、いとこなる、おばなる、そが子なる、みなつれだちたり。山にまうできて、木の葉かきはらひ、水そゝぎ、

拝み給ひたるに、先だつものは涙なり。はかせ、

苔むして わかちかれたる^{*} 石ぶみを

あらふは袖の 涙なりけり

ないき、

むかししのぶ 涙は袖に せきあへず^{*}

苔の下にも しみやわたらん^{*}

あたらしき塚の、四五あるを、「これはたれ、かれはそれ」とさしおしへたるを、まこととおぼえずげに、内記、

なき数の そふにつけても かなしきは

ありとはしらず 露のこの身を

あねの君、ないきの袖をとらへて、

ともにみし 人はしるしとなりぬなり

われはたいたく おひにけるかな

「命のかぎりしはこ」とて、内記もともに、涙をひとめうけて、「君たちは、なき世までもこゝにこそ。土偶人のたとひのごと、なをいとめでたし。朝にひまなき身は、都にてしぬべくあれば、この数にはゑこそいらね。なを命のうちにこそ」とて、

契りおきて またもとひこん ふる里の

桜の雪と うりつまぬまに

【現代語訳】十一日、一族の墓を拝みに行く。博士の姉・妹・いとこ・おば・その子供などが皆連れ立つ「て行つ」た。山に詣で来て、木の葉を掻き払って、水を注ぎ拝みなさるにも、先づ涙が流れ出るのであった。博士「は次のように歌を詠んだ。」

苔むして、判別しかねる様になった碑を、洗うのは袖を濡らす涙であることよ。

内記「も次のように歌を詠んだ。」

昔を偲ぶ涙は、袖では塞き止めこらえることはできず、苔の下にも染み渡るだろう。

新しい塚の四つ五つあるのを、「これは誰、それは誰」と指し教えるのを、本当とも思えない様子で、内記「は次のように歌を詠んだ。」

亡くなった人の数に加わるにつけて哀しいのは、露のようにはかないこの身のいつまで生きているか知れないことだ。

姉の君が、内記の袖を掴んで、「次のように歌を詠んだ。」

「かつて」共に見た人は墓標となつてしまった。私もまた大変老いてしまったよ。

「命のある限りは来なさい」と言い、内記も共に目に涙を一杯浮かべて、「あなた方は、あの世までも、ここに「居ることができる」。」

の土地の土に戻れる」土偶人の例のようで、それでもまだ大變めでたい。「私のような」宮仕えに暇なき身は、都にて死ぬように決まつているであろうから、この数に入ることができない。まだ命のあるうちに」と言つて、「次のように歌に詠んだ。」

約束しておいて、また訪ね来よう。故郷の桜が雪と降り積まない間に。

【校異】*水そそぎ 新田本「水そそぎ（ぎ）て」。*給ひたる 新田本「たまひたる」。*わかちかれたる 小天地閣本「れ」を「ね」に見せ消ち。新田本「ね」。*むかし 新田本「昔」。*涙 新田本「なみた（だ）」。*わたらん 新田本「わたらむ」。*四五 新田本「よつ五」。*おぼえ 小天地閣本「おぼ多」。*契り 小天地閣本「ちぎり」。

※新田本は底本の十四葉表三行目「なき教」より十六葉裏五行目「おもひたらず」に至る部分が落丁。

【注】○土偶人 雨が降ればどこかに流されてしまう木偶（木彫りの人形）に対し、土偶は溶けて土に帰ることができる、の意。「土偶人曰、我生於土、敗則歸土。今天雨、流子而行、未知所止息也」『史記』孟嘗君伝。

《契りおきて…歌》○うりつまぬまに 「降り積まぬ間に」の誤記か。

《一六》この湊に、親にけうふかきをうなあり。八十ばかん

なる父母の、まどしくすめる、道のほど二十町ばかんなるを、雨にも、風にも、日ごとに通ひて、くひ物、きるもの、けがれたるものをさへに、とりまかなひて後ぞ、わが屋にはかへる。いつも巳の時にゆきて、ひつじさがりて帰る。十年あまり、ひと日もたゆむことなし。今は母はうせて、父九十余なり。夫もなくなりて、そが子なん、家のわざして世をわたる。はかせこのをうなをみると、十二日、例の人々ともなひてゆく。「けふも親の家にゆきて、いまだ帰らず」といふ。ほいなくて、おくりものとぐめおきてかへりぬ。またの日なんかのをうなまいりかしこまりて、あひみたまひし。

【現代語訳】この「掛保の」湊に、親孝行の姫がいた。八十歳ほどになる父母が、貧しく住む、道のりは二キロメートルほどの「ところ」を、雨の日にも、風の日にも、毎日通って、食べるもの、着る物、汚れ物までも、世話した後に、我が家に帰っていた。いつも午前十時頃に行き、午後二時頃を過ぎてから帰った。十年ほど、一日もたゆむことがなかった。今は母は亡くなり、父は九十余歳である。夫も亡くなり、その子供が、家業をして世を過ごしていた。博士はこの姫を見ようと思い、十二日に、例の人々を連れて行った。「博士達が家に行ったところ、」今日も親の家に行つて、まだ帰らない」と言う。残念であるが、「博士達は」贈り物を残して帰った。他日に、この姫が参上し札を言い、御対面なさった。

【校異】*屋 小天地閣本「や」。*ひと 小天地閣本「二」。

【注】○親にけうふかきをうな この孝婦については、高尾義典著「八木氏が妻其父に孝行の事」(股野玉川著『播州龍野四孝伝』所収)に詳しい。これによると、女の名は「はつ」と言い、明和六年(一七六九)の歳に藩侯より褒賞された、とある。解説参照。○町 六十間で一町。一町は約百十メートル。

《一七》またさい村といふ処に、めしゐあり。子もなく、はらからもなし。そが妻なる、夜は麻を、手まさぐり、昼はめしゐの手を引て、かなたこなた、よろほひありきて、よねをこひて、世を過しける。二十余年おなじさまなり。これはなをざりのかたいめのやうなるを、そのさまのいとまめまめしきがあはれなりとて、国の守より、よねたばひたることあり。博士の道に行あひ給ひたるには、ものなどとらせたり。

【現代語訳】またさい村という処に、盲目の人がいた。子供もなく、親族もない。その妻は、夜は麻緒を手でよりあわせ、昼は盲目の人の手を引いて、あちらこちら、よろよると歩き、米を乞うて、生活していた。二十余年ずっとそうであった。これはいいかげんな乞食妻のようではあるが、その様子のとても極めて誠実であるのが哀れであるという事で、国守から、米を賜ったことがあった。博士が道で行き会われた時には、ものなど与えていた。

【注】○さい村 現在の兵庫県龍野市掛西町佐江村を指す。○麻を「麻芋」。麻の茎を細かく裂いて作った糸。または麻。○かたいめ「乞食妻(女)」。
かたゐめ

《一八》おなじ処に、照円寺といふ住持の僧の弟に、教順が妻なむ、世にためしすくなきまめ人にぞありける。教順がわかき時、たにはにいきてすみける、その時ゑたる妻なり。さいはひなく、さすらへて、難波に移りすめる。いとまどしかりければ、はらからなどは、「いざ帰りね。外によすがもとめてよ」といふを、聞もいれず。三とせばかんありて、この教順、物のけさへそひて、にはかにつれて、ふる郷にくだりぬ。いとくおどろしきものゝけにて、よりそふ人もなきを、このめなん、よるひるはなれず。さるは、うちのゝしり、あるはふみさいなみて、しぬべくあることたびゝなるを、つゆうらみたるけしきなし。

【現代語訳】同じ処に、照円寺という住持の僧の弟の、教順の妻(である)、世に稀な実直な人が居た。教順が若い時に、丹波に移り住み、その時に娶った妻である。「夫婦は」幸薄く、放浪して、難波に移り住んだ。とても貧しかつたので、「妻の」親族達は、「さあ帰ってきなさい。外に頼りを求めよ(故郷に戻り、他に頼りとなる夫を求めよ)」と言うが、「妻は」聞き入れなかった。三年ほどたって、この教順は、

物の怪までも憑き、突然に「妻を」連れて、故郷に下った。とても恐ろしい物の怪憑きであり、近寄る人もいなかったが、この女は、朝も晩も離れなかった。そうではあるが、「物の怪憑きは」大声で騒ぎ立て、あるいは踏み奇んで、「妻は」死にそうになることが度々であったが、少しも恨んだ様子が無かった。

【注】○照円寺 龍野市掛西町佐江に現存する。第一七段「さえ村」注、および口絵写真を参照。○教順の妻 貞婦の名は「さん」といい、子を亡くして心を病んだ夫「教順」によく仕えた。「さん」については、石原公章著「播州佐江村貞婦小伝」(股野玉川著『播州龍野四孝伝』所収)、竹山著『貞婦記録』(『懷徳堂五種』所収)に詳しい。解説参照。

《一九》兄の僧は、心づよきものにて、さしもおもひたらず、寺のかたへに、かたつむりの屋のやうなる庵をつくりて、ものゝけひとりかくひものを、日ごとにおくる。妻とふたりの子とは、たれかはしらん。さるは、糸をくり、布をおりなどして、すぐしける。くひものなどは、さらに人のくふべきものにもあらず、それだになき日もありとなん。はらからは、いやましに「かへれ」とせむるを、「かくおどろくゝしきものゝけを、たれかはうしろみ聞えん。さなきだに、『帰らじ』とちかひてしを、いまは命をかぎり」とてぞ、やみける。

【現代語訳】兄の僧は、情が薄く、思いやりを施さず、寺の隅に、狭くみすばらしい庵を作つて、「弟を住まわせ」物の怪憑き一人の食べ物、毎日届けた。妻と二人の子と「のこと」は、誰が面倒をみてくれるだろうか「誰も面倒を見てくれなかった」。「妻と二人の子供は」あるいは、糸を紡ぎ、布を織つたりして、生活した。食べ物などは、全く人が食えるものでは無く、それさえ無い日も有つた「と言うことだ」。親族は、いよいよ「帰れ」とせき立てるのを、「妻は」「このようにおどろおどろしい物の怪憑きを、誰がお世話をするのか。そうでなくても、『帰らない』と誓つたのを、今は命の限り「世話をする」」と言つて、そうするのをやめた。

【校異】*屋 小天地閣本「へや」。*え 小天地閣本「へ」。

【注】○心づよし 情にほだされない。つれない。○かたつむりの屋 みすばらしい仮の家。

《二〇》冬のさむき夜しも、物のけは、あかはだかにて、庭にたゞずめば、妻もおなじごと、衣ぬぎて立そひゐるを、里人見とがめて、いさめける。「ものゝけはねちつよきものにて、さむさをだにしらぬなれば、いかゞはせん。たゞの人の、なでうさるわざあらん。いたづきのいるべく、いとおろかなるわざなり」といふに、「それをしらぬにしもあらねど、おつとのさむき庭にゐ給へるを、ひとり内にゐてあたゝかにあ

らんは、わが心とてゑせず」とこたへける。その心もちひ、皆みなかうやうなる。「げにめづらかなるまめ人かな、女のためしにしつべきこと」ゝて、博士また例の人々引つれていきたり。

【現代語訳】冬の寒い夜であっても、物の怪憑きが、丸裸で、庭に佇めば、妻も同じように、衣を脱いで立つて傍らに寄り添っているのを、里の人が見とがめて、諫めて、「物の怪憑きは体温が高く、寒ささえ知らないのだから、何ともない。普通の人が、どうしてそのような行動が出来るか。「そんなことすると」病気になるし、とても愚かな行動だ」と言うが、「それに対して彼女は」「私も」それを知らぬではないが、夫が寒い庭にいらつしやるのを、一人「家の」中に居て暖かであるのは、自分の気持ちとしてはすることが出来ない」と答えた。その心遣いは、万事このようであつた。「本当に世に稀な実直な人だ。女性の手本にするべきだなあ」といって、博士はまた例の人々を引き連れて「この彼女のもとに」行った。

【校異】*しらぬにしも 中之島本「しらぬにも」。*給 新田本「たま」。*心もちひ 中之島本「心もち」。*皆 新田本「みな」。

【注】○ねち 熱。

《二一》かのかたつむりの屋を見れたるに、しきこもさへ、

ひとへむしろをしきたり。人はあらず、こゝかしこたづぬるに、小河におりて菜をあらふ女あり。髪も衣も、かたいめのやうなれど、つらつき＊のきよらにあでやかなる。「かれにこそ」と、よりて問に、そなりけり。「や」とよびとりて、庵に帰り、あるやうをとひきくに、ほとくのどやかにうちかたらふに、みな人涙おとして、おくりものとり出るほど、ものゝけ帰りにける。人おそれるものゝけなりと聞て、あいなくて帰りぬ。かの物がたりのついで、「丹波国は、境をへだてゝ、文のたよりも、ひとゝせにふたゝびはせず」となげきけるを、「源生のいとこに、かの国司につかへたるあり。九鬼氏なり。しれりや」といふに、「まことさるおんなからひにや。その父の君は、おのれが父と、心しれる友になん。子なるは、はらからが文よむ友にて、日ごとによりむつび給ひし。今は父の君はなくなり給ひしにこそ」とて、涙ぐみたり。「さるは、そが方に文のたよりは、常にもあれば、いで致書郵せん。わがかたに文こせよ」といひければ、よろこぼひて、後にぞ文かきておこせたる。「こたみはいかなれば、かくばかり、孝あるもの、まめなるものに、数おほくあひみたることや」と、はかせのよろこぼひ給ひたる、ことはりなるや。

【現代語訳】 その蝸牛の小屋をのぞき込むと、敷物ですら、一重の蓆

を敷くだけである。人はおらず、こゝかしこ探し求めると、小川に下りて菜を洗っている女がいる。髪も衣も、乞食女ようであるが、顔つきは清らかにして艶やかである。「きつと彼女だろう」と、近寄って問うと、そうであった。「もしもし」と呼び寄せて、庵に帰り、有り様を問い聞いて、おおかたのどかに語らったが、みんなは涙を落として、贈り物を取り出す頃、物の怪憑きが帰ってきた。人を怖れる物の怪憑きであると聞いて、仕方なく帰った。その語り合いのおりに、「彼女は」「丹波の国は、境をへだてていて、文の便りも一年に二度もしない」と歎いていたので、「私は」「源生の従兄弟に、かの国司に仕えている者がいる。九鬼氏という。知っているか」と訊くと、「彼女は」「本当にそのような仲でいらつしやるのですか。その父君は、私の父と、心知れる友です。子は〔私の〕兄弟が〔ともに〕学問をした友にして、常日頃睦まじくなさっていました。今は父君はお亡くなりになりました」と（言つて）、涙ぐんでいた。「私が」「そうであれば、その〔九鬼氏の〕方に手紙の便りは、常に有るので、さあ書函を送らう。私の方に手紙を寄越しなさい」と言うと、「彼女は」とても喜び、後で文を書いて寄こした。「今回はどうして、これほどまでに、孝行な者や、誠実な者に、数多く会ったことだろう」と、博士がとてもお喜びになったのは、もつともであろう。

【校異】 ＊かたいめのやうなれど 中之島本「かたいめのなれど」。

＊問に 新田本・中之島本「とふに」。＊文 手稿本「文かきて」（「かきて」を見せ消ち）。＊こたみ 小天地閣本「こたみ」。

【注】 ○しきこも 「敷き蓆」。土間などに敷く荒く織ったむしろ。

○九鬼氏 竹山著『貞婦記録』では「かの(さんの)親元は九鬼河内侯の臣にて」とある。

ちねの」の転用。

《二三》おほぢの墓のあかほの郡にあるを、拜みにとて、十五日のつとめて、ふたりの生に、国つこのしたしき三人つれていきけり。ないきも、おなじさまにいくべかりけるを、長谷のわたりに、母かたのおほぢの墓あるを、おがまんとて、おなじ日しも、引わかれてゆく。「いとけしかるわざや」と、人はいへれど、「たらちねの家つとは、これにまさるものやはある」と、心ひとつに思ひとり給ひて、ひとり立わかれたる、いとあはれなりや。

【現代語訳】祖父の墓は赤穂郡にあったが、〔博士はその墓を〕拜みにといて、十五日の早朝、二人の学生と、〔播磨の〕国の親しい二人とを連れていった。内記も、同じ所に行くべきであつたが、長谷の辺りに、母方の祖父の墓があるのを、拜もうとして、全く同じ日に、別れて行った。「とてもけしからんことだ」と、人は言うけれども、〔内記は〕「母へのみやげものは、これに勝るものはあるうか」と、決心なさり、一人立ち別れたのは、とても情の深いことではないか。

【校異】*母かた 新田本「ははかた」。

【注】○おほぢ 祖父。○たらちね 母の意。母に掛かる枕詞「たら

《二三》上津といふ処に、しれる人あり。そが子なる、岡の翁にもまなびしける、これとつれてゆく。美作にも、しれる人のありける。博士のくだり給ひたりと聞て、そが子を使におこせたる。その帰る道なれば、これもつれたり。上津は長谷にほどちかき処なれば、そこにとまりぬ。山のかたそばに、家つくりおもしろくしたり。いたう心にしみて、

偶為山中客 偶たま山中の客と為り、
便得山中趣 便ち山中の趣を得。

青山与我静 青山 我と静かにして、
泉声滌我憂 泉声 我が憂いを滌う。

青山窓外聳 青山 窓の外に聳え、
平田左右連 平田 左右に連ぬ。

一抹暮烟起 一抹の暮烟起ち、
俱在有無間 俱に有無の間に在り。

愛此山中宅 此の山中の宅を愛づれば、

山水為己有 山水 己が有するところと為る。

月出東嶺上 月は東嶺の上に出で、
亦照茅齋裏 亦た茅齋の裏を照らす。

この君は、いたうふるきことをめでしたふほんしやうにて、
韻なども、いにしへのをとりて、いまの世には、めなれぬこ
とおほかり。

【現代語訳】上津という所に、知人がいる。その子は、岡の翁に学ん
でいて、この者と連立った。美作にも、知人がいた。博士が「大坂か
ら」下つて来られたと聞いて、「美作の知人は」その子を使い寄越
した。「美作への」帰路なので、これも連立った。上津は長谷にほど
近い所なので、そこに泊まった。山のそば近くに、家の構えが趣き深
く建ててあつた。とても心にしみて、「次のように漢詩を作った。」

偶々山中の客となり、たちまちにして山中の趣を得る。

青山は私と共に静かで、泉の聲は私の憂いをぬぐい去る。

青山は窓の外に聳え、平らで広々とした田が左右に連なっている。
一抹の暮烟が立ちあがり、みな有るか無いかぼやつと見える。

この山中の宅を愛でていると、山水は私の物となる。

月が東の嶺の上に出て、やがて茅葺きの部屋の中をも照らす。

この君は、とても古いものを愛し慕う本性「を持つてゐる」で、「漢
詩で踏む」韻なども、昔の「音」を取つて、今の世「の漢詩」では、
目慣れぬ「韻を踏む」ことが多かった。

【注】〈偶為山中客…詩〉○滌「滌」は、洗う。

〈青山窓外聳…詩〉○平田 平らでひろびろとした田。

〈愛此山中宅…詩〉○茅斎 茅葺きの部屋。

《二四》あけの日、かのはかに詣で、

ありし世を しらすすぎこし なき跡の

しるしばかりを 見るぞ悲しき

たらちねの遠くへだゝりて、なつかしうつきせずあはれに思
ふたまへる御心むけを、

身にそへて ともになくねを うば玉の

夜の台に^{うたな}いかで聞えむ*

これより帰るべかりけるを、かのみまさかなるが、あひみま
くほしさにぞ、其子とつれて、山路をたどりつゝゆく、杉が
坂をこゆ。はりまとみまさかの堺にて、建武のみかどの、塵
をかうぶりてこえ給ひし跡なり*。

【現代語訳】明るる日、その墓を詣でて「内記は次のように和歌を詠
んだ。」

ご存命中には、お目にかかることもなく過ごしてしまった。「今
となつては」亡くなった跡の墓標しか、見る事ができないのは
悲しいものだ。

母が遠く隔たった「大坂の」地から、懐かしくて尽きることなく感慨深く思いになるお心を、「次のように歌に詠んだ。」

身に携えて、一緒に泣く声を、暗い墓穴「にいらつしやるお爺様」に、どうにかしてお届けしたい。

それから帰ろうとしたが、かの美作にいる「知人」が、会いたいと言うので、その子と連立って、山路をたどりつつ行き、杉坂を越えた。「そこは」播磨と美作との境で、後醍醐天皇が、塵を被りながらお越えになった旧跡である。

【校異】*思ふ 新田本「おもふ」。*御心むけ 小天地閣本「御むけ」。*聞えむ 新田本「きこえん」。小天地閣本「聞えむ」。*こえ給ひし 新田本「こえたまひし」。

【注】(身にそへて…歌) ○うば玉の 枕詞、「ぬばたまの」の転。「黒」「闇」「夜」「夢」にかかる。○夜の台 「夜台」は墓穴の意。その「台」を大和言葉で「うてな」と読ませている。

○建武のみかど 九十六代後醍醐天皇。後醍醐天皇は隠岐に流される途中、杉坂峠を通っている。『太平記』巻四に、備前の武将児島高德が、後醍醐天皇をこの杉坂峠で奪還しようとして失敗したと見える。

《二五》暮つかたに、瀧もとの里にいたりぬ。かのあひしれるが家なり。このあるじは、博士の父にものまなびしたりし。

ざへかしこく、けうふかくて、旌表をゑたるものなり。あざなを子華ときこゆ。そが子も、今の博士にものまなびたりし。よもすがらかたらひあかして、たゞひとり立帰り、また上津にとまりて、十八日、いぼの湊に帰りにける。はかせは、ふたひさきにかへりたまひぬるが、赤穂のことは、聞もらしつ。

【現代語訳】日暮れに、滝の下に里に着いた。例の知り合いの家である。この主は、博士の父に学んだことがある。学問(漢学)に優れており、孝に篤く、「孝子として幕府に」表彰された者である。字を子華という。その子も、今の博士に学んでいた。夜通し語り明かして、ただ一人で帰り、また上津に泊まり、十八日、揖保の湊に帰ってきた。博士は、二日前にお帰りになったが、赤穂のことは聞き漏らした。

【校異】*あひしれる 新田本「相しれる」。*ゑたる 新田本「得たる」。*かへり 新田本「帰り」。

【注】○滝の下 岡山県美作町田殿の小字に滝本がある。○ざえ 学問、特に漢学。○旌表をゑたるもの 「旌表」とは、人の善行を公表して衆人に知らせること。稲垣子華は宝暦十三年(一七六四年)に、孝子として幕府に表彰されている。寛政九年(一七九七)没。岡山県美作町田殿に弟子三十余人が建てた彰徳碑がある。銘の撰文は中井曾弘(蕉園)。また別に昭和十三年建立の碑もある。口絵参照。

《二六》廿日には、あぼしといふところに、みないきたり。湊の川しも、百町ばかりがほどなり。柴つむ舟にのりてくだる。ひんだりは、野ひろく、山遠し。朝霧のたえまに、岡べの松、処々に見ゆ。右の岸は、山のすそなり。一町ばかりに山をみる所もあれど、おほかたは山の根をこぎめぐる。山をきりたらむやうなる高き岸に、松などさかさまに生て、おちかゝりたるおほかり。風もなく散花のおのづからに舟のなかにおつるもあり、山川のきよきながれの、さゝやかなる石の上をはしる。瀬々のさざ浪は、氷をゑりたらんやうなり。底はひら板なる舟の、こぎとほれば、玉をかきならす音なんしける。またふかき処は、青みわたりて、鯉などおほくあつまるとぞ。

【現代語訳】二十日には、網干というところに、皆が行った。〔揖保の湊の〕川下は、百町ばかりの距離である。柴を積む舟に乗って〔川を〕下る。〔川の〕左側は、平野が広く、山が遠い。朝霧の絶え間に、岡のはずれにある松が処々に見える。〔川の〕右側は、山のふもとである。一町ばかり〔先〕に山が見える所もあるが、大方は山のふもとを漕いで巡る。山を切ったような高い岸に、松などが逆さまに生えて、松が上から覆い被さりそうになっているものが多くある。風もなく散花がおのづから舟の中に落ちるものもあり、山あいの川の清い流れが、小さな石の上を早く流れる。瀬々のさざ浪は、氷を彫ったようである。底は平板でできた舟が、漕いで通れば、玉をかきならすような音がす

る。また〔水の〕深いところは、青み渡って、鯉などが多く集まるということだ。

【校異】*朝霧 新田本「朝き（ぎ）り」。*山をみる 新田本「山を見る」。*きりたらむ 小天地閣本「きりたらたらむ」。新田本・中之島本「きりたらん」。*高き 新田本「たかき」。*散花 新田本「ちる花」。*舟のなか 新田本「舟の中」。

【注】○あぼし 「網干」。揖保川が播磨灘に注ぐ河口にある集落。今の姫路市網干区。○町 六十間。約一一〇メートル。百町は約十一キロ。

《二七》都ちかきところならましかば、やかた舟に絲竹の音は、たへまあらじを。人々韻わかちて、から歌つくれりける。

野生

蒼崖^{*}与白水 蒼崖と白水と、

奇絶奪丹青 奇絶丹青に奪る。

幽賞欲凝目 幽賞目を凝らさんと欲するも、

舟軽不可停 舟軽く停まるべからず。

源生

草樹倚懸崖 草樹懸崖に倚り、

盪槳廻其趾 槳を盪し 其の趾を廻る。
空翠染我衣 空翠 我が衣を染め、
飛花墜我后 飛花 我が后に墜つ。

内記

擊汰乱山影 擊汰 山影を乱し、
白鷗避舟起 白鷗 舟を避け起く。
舟過波紋定 舟過ぎて 波紋定まり、
鷗泛山樹裏 鷗は泛ぶ 山樹の裏。

博士

載酒扁舟下急灘 酒を載せ扁舟 急灘を下る、
急灘回轉幾重巒 急灘 回轉す 幾重の巒。
山色水容評未徧 山色水容 評未だ徧からざるに、
篙人已報是羅干 篙人 已に報ず 是れ羅干と。

内記はまた、ふな人のことばとて、

載薪樵兮水路熟 薪樵を載せ 水路熟す、
夏日熱兮冬日寒 夏日は熱く 冬日は寒し。
此日何日兮遇公子 此の日何の日ぞ 公子に遇う、
續窈窕兮其鬼神 續んにして窈窕たり 其の鬼神。
水益清兮山益青 水益ます清く 山益ます青く、
花益妍兮我益老 花益ます妍しく 我益ます老ゆ。

懷公子兮不得語 公子を懷えども 語るを得ず、
独歎靄兮心之憂 独り歎靄として 心は之れ憂う。

まこと舟人の口より、かくいひ出たらんは、誰もく衣ぬぎて
かづけましを。

【現代語訳】都に近いところならば、屋形船に音楽が絶え間ないだろ
うに。人々は韻を分けて、漢詩を作った。

野生

青ぐらい崖と白水と、「その」珍しさと素晴らしさは 絵画にま
さる。

静かに鑑賞しようとして目を凝らそうとするが、舟は軽やかに下
つてゆき停まることができない。

源生

草木や樹木は断崖に倚り、舟を漕ぐ櫂は「崖の」下を巡り行く。
空の翠色は私の衣服を染め、散った花びらは私の杯に墜ちる。

内記

波に棹をさすと、「水面に映った」山影を乱し、白い鷗は舟「が
進んでくるの」を避けて飛び立つ。
舟が過ぎて波紋が静まると、山樹「が取り囲む流れ」の中で、鷗
が「ふたたび波に」浮かぶ。

博士

酒を載せて小舟が急灘を下る。早い流れが幾重もの山々を巡る。

山や川の様子を一通り論ぜぬうちに、船頭はもう「ここらが綱干だ」と知らせる。

内記はまた、船頭の言葉として、

薪を載せるよ、水路には慣れっこ。夏日は熱く、冬日は寒い。

公子にお遇いするなんて今日はなんと結構な日だ。盛んで奥ゆかしいその鬼神。

水は益々清らかで、山は益々青い。花は益々あでやかに「なるのに」、我は益々老いる。公子を心に思つても語ることはできず。独り溜息をつき、心は憂える。

本当に舟人の口から、このように言い出たなら、『説苑』の鄂君の故事のように「誰もが衣服を脱いで頭に被せて褒美にしたらどうに。

【校異】*蒼崖 中之島本「蒼蒼崖」。*水容 小天地閣本「水客」(見せ消ちにし、朱筆で「容」に改める)。*偏 小天地閣本「編」(見せ消ちにし、朱筆で「偏」に改める)。新田本「遍」。*羅干 中之島本「綱干」(「綱」の横に「羅」をつける)。*ふな人 小天地閣本「舟人」。*水益清兮 中之島本「水益清」(横に「兮」をつける)。*誰も誰も衣ぬぎて 新田本「たれもくきぬぬき(ぎ)て」。

【注】《蒼崖与白水…詩》○蒼崖 青ぐらい崖。○簪丹青 「簪」は「庄倒する、まさる」。「丹青」は「絵画」。○幽賞 心静かに鑑賞する。静かに味わう。

《撃汰乱山影…詩》○撃汰 波に棹さすこと。「汰」は「波」のこと。

《載酒扁舟…詩》○扁舟 小舟。○篙人 船頭。

《載薪樵兮…詩》○載薪樵兮 この歌に関わる資料として、新田本に『説苑』善説からの引用を記した紙片あり。全文は以下のようである(原文は句読点、括弧はなし)。「説苑 鄂君方汎舟於新波之上、乗青翰之舟、張翠羽之蓋。會鼓鍾之音、越人擁楫而歌曰、『今夕何夕兮、蹇洲中流。今日何日兮、得與王子同舟。山有木兮木有枝、心說君兮君不知。』於是鄂君揄袂而擁之、舉續被而覆之。」鄂君と同舟できた喜びを歌にした越人の舟人に対し、鄂君が褒美に着物を被せてやったという話。○續 盛んなさま。乱れるさま。○窈窕兮其鬼神 『詩經』周南「関雎」に「関関雎鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑。」とある。「窈窕」は奥ゆかしい、奥深い。前に「公子」(おそらく博士らのこと)とあるので、彼らの常人離れした奥ゆかしさを「鬼神」と表現しているのか。○欸露 「欸」は、船頭が舟を漕ぐときに調子を合わせるために掛け合う声とも取れるが、ここでは「うらむ」「なげく」の意に取る。「露」は「露露」で、雲の集まる様となるように、嘆かわしい思いが鬱積した状態。○かつけ 前出「載薪樵兮」注参照。

《二八》ゆきつきてはまた、海舟にのりうつりて、なげ石といふを見にゆく。海の中に、いとおほきやかなる石、数しらず島のごとあつまりたり。誰にか、

あまかける 神の投げん 石なれや

うちよする浪に ゆるぐともなき

この石の上にて、酒のみうたひあそぶ。あは、さぬき、島々みゆ。沖にはあまの小舟、島のごと、釣するあり、つなでひくあみのおほかり。また誰にか、

いざこゝに釣するあまのすて小舟

なみにまかせて世をやへなまし

うらやましげにおもふも、やすげなきうれへははたしらずかし。

【現代語訳】行き着くとまた、海舟に乗り移り、投げ石というものを見に行く。海の中に、大変大きな石が、数しれず島のように集まり立っている。誰かが〔歌に詠んで〕、

空を駆ける神が投げた石なのだろうか、打ち寄せる波に揺るぐこともないよ。

この石の上で、酒を飲み歌い遊んだ。阿波、讃岐〔などの〕、島々が見えた。沖にはあまの小舟が、島のように〔海上に点々と浮かんでおり〕、釣しているものもあり、綱手縄で網を引く舟も多い。また誰かが〔歌に詠んで〕、

さあここで、釣りをする漁師は、捨てた小舟のように、波にまかせて、この世を過ぐすのだろう。

〔漁師を〕羨ましく思っても、〔彼らの〕不安な憂いはおそらく知らないだろうよ。

【注】○あま 海人。男女を問わず、漁業や航海に従事する人々を言う。○なげ石 兵庫県御津町刈屋の沖合いにある、岩が寄り集まってきた小島で、現在も新舞子浜にある。口絵写真参照。

《二九》こゝのつかさなりける人、このごろ任はてゝ、のぼらんとすなる。よきげちや得たりけん。勢ひまうになりて、友なびきたる。あないせる里人、岩かどにうちよせたる藻をひろひて、「これなんこむぶのりといふなり。これもて酒すゝめたてまつらん」とて、もて出ける。かの前司の前におきて、

うちよする浪のもくずをとりぐに

君がさかへのかずとりにせむ

前司いたうけうじて、とりぐめぐる盃の、数しらずなりぬ。さすがに、としごろすみなれたる浦のあまの、

もしほたれてわびつゝすぎし年月も

よそのかごとにかこたれぬらん

と心のうちには思ひけめ。暮ちかくなるほど、風かはりたり。浪あらし。「もとの道にはゑしも」と、いひさはぎて、ちかき磯にこぎよせて、細道をたどりつゝ、塩やく処など見て、かの里人の家にとまる。あけの日、室津にわたりて帰る。

【現代語訳】この役人である人は、このごろ任期が終わり、都へ上ろうとするのだという。栄転の下命を得たのであろう。「その人の」勢いが盛んになって、友が頼りにして従っている。案内をする里人が、岩かどに打ち寄せた藻を拾い、「これは昆布海苔です。これを「肴として」持っていきお酒をお勧めいたしましょう」と、持つて出る。例の前司の前に置いて、

打ち寄せる、浪の藻くずを「とる」ようにとりどりの、君の繁栄の、数かぞえにしよう（この海草を数とりに使って一つ一つ数えましょう）。

前司は大変興じて、いろいろと酌み交わされる盃が、数も分からないほどになった。やはり、長年住み慣れた浦の漁師が、

塩水が藻塩草にしたるように、「しおたれて」（涙に暮れて）佐びしく過ぎた年月も、よそ（次の赴任地）で愚痴られるのだろう。

と、心の中では思っているのだろう。夕暮れ時が近くなるころ、風（の強さ）が変わり、浪が荒くなった。「もとの道にはとても…「戻れないだろう」と言い騒いで、近い磯に「舟を」漕ぎ寄せて、細道を辿りながら、藻塩を作るのに海藻を焼く所などを見て、あの里人の家に泊った。明くる日は、室津に渡って帰ってきた。

【校異】*よきげちや得たりえけん。勢ひまうになりて 手稿本は「けふしも」を見せ消ちにし、この句を記す。新田本はこの句がなく、「けふしも」に作る。*岩かどに 新田本「巖かと（ど）に」。*こむぶのり 新田本「こんぶ（ぶ）のり」。*これもて 小天地閣本「これ

をもて」。*もて出ける 新田本「もていて（で）ける」。*前司の前におきて 新田本「前司のまへにおきて」。*かずとりにせむ 新田本「数とりにせん」。*いたうけうじて 小天地閣本「いとうけうじて」。*盃の 新田本「さかつ（づ）きの」。*としころ 新田本「年こ（こ）ろ」。*心のうち 中之島本「心の内」。*思ひけめ 新田本「おもひけめ」。*暮ちかく 新田本「くれちかく」。*もとの道 中之島本「もの道」（横に「と」をつける）。*いひさはぎて 中之島本「いひわき（ぎ）て」（「ひ」の脇に「さ」を記す）。*塩やく 小天地閣本「鹽やく」。

【注】○げち 「^ガ下知」。下命。

〈うちよする…歌〉○かずとり 数かぞえ。ここでは、海草を一つ一つ数えながら相手の繁栄や功績がいかに大きなものかを祝う場面。『散木奇歌集』第五祝部に、「君がへんやほよろづ代のかずとりてあまのみ空におきたらはさん」という歌がある。○けうじて 歴史的仮名遣いでは、「けうじる（希有じる）」「きようじる（興じる）」と使い分けがあるが、混同されることも多かった。ここでの「けうじて」は「興じて」ととる。

〈もしほたれて…歌〉○もしほ 「藻塩」。海藻に海水を注ぎ、塩分を含ませたものを焼いて水に溶かし、その上澄みを釜で煮詰めて作る塩。また、海藻にかける海水のこと。「しほたる」で、「塩水がたれる」と「涙に暮れる」の両方の意味がある。『古今和歌集』に「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつとわぶと答へよ」とあるのを参照。○室津 今の兵庫県揖保郡御津町室津。揖保川下流から、直線距離でおおよそ七キロ。室津に渡った目的は、室津にある賀茂神社への参

拝か。

《三〇》廿二日、河辺に出て、あそぶ。例の人々の外に、おほくともなひたり。網ひろげて魚とるもあり。竿もちてつるも、「あゆはまだいとちいさし、ますのいをはのぼらず」と、人々くちおしがりける。この国に、飢饉うちつゞきて、民のわづらひありとて、制ありて、なべてよききぬをきるることなかりき。さるは、をんななどは、いとわびしきことに、いひおもひける。されどそれながらにそうぞきつれたり、髪あげたるすがた、まへつかたは、いとひなびたるを、いまはさしもあらず、都のかたにあるとあること、みなうつしとりて、いまめかしう、ひな人とおとしいふべきかたはしもなし。内記うちみやりて、「いまは外にうつすべきものなし、たゞ心のあだなるのみぞ、なうつしそ」とのたまへば、ほゝゑみつゝ、つゝまじさに、松陰にひきいりけり。この日なん、空のけしきのどかにて、いとけふありけりとなん。されどかきつくべきことはなかりき。

【現代語訳】二十二日、川辺に出て遊んだ。いつもの人々の他に、多くの人を伴って遊んだ。網を広げて魚を捕っている人もいる。竿を持って来て釣りをするのが、「アユはまだとても小さいし、マスは上って来ていない」と、人々は残念がった。この国に飢饉が続いたため、

人々の苦勞となるということで禁制が出て、いい服を着ることもなかった。そこで、女たちは「それを」とてもつまらないと思っていた。しかし、「その女たちも」それ相応にめかし込んで連れだつてやつて来た。髪を上げたその様子は、以前ならとても田舎臭かったのに、今はそれ程でもない。都あたりで流行しているものはすべて真似をして、当世風になり、田舎者だと見下されるような点はまったくくない。内記がそれを見て、「もうそれ以上、〔都の人の〕真似をするところはあります。ただ心の不誠実さだけは、真似をしないで下さい」とおっしゃるので、微笑みながら、遠慮深げに松の木の下に引き下がった。この日は、空の様子がのどかで、とてもいい日だったということだ。しかし、書き残しておくほどの出来事は無かった。

【校異】*網ひろげて 小天地閣本「網ひけて」「ひ」と「げ」の間に朱筆で「ろ」を挿入。*ますのいをは 新田本「ますのいをも」。
*そうぞき 中之島本「そふぞき」。*都のかたにあると 中之島本「都のこた」、新田本「ありと」。*いまは 新田本「今は」。*ひきいりけり 新田本「ひきいりけり」「けり」を同じ「けり」に見せ消ち。

【注】○ますのいを サケ・マス類の魚を指すが、具体的に何の魚を指すのか未詳。○いひおもふ 「言ひ思う」。口でも言い、心でも思う。○そうぞく 「装束く」。装う、飾り立てる。○うつす 「写す」。真似する。模倣する。○あだなり 不誠実でいい加減だ。はかない。○ひきいる 「引き入る」。引き退く。引き下がる。○けふあり 「興あり」。趣深い。

《三二》廿四日、都に帰りのぼらんとて、とくおきて、ものしたゝめなどするに、「馬のはなむけせん」とて、処せくいきたり。かのやまうも、このころうちつゞきて、おこたりさはやぎたまひぬるを見おきて、うしろめたうはあらずかし、「いま四年たちなば、今やうの人のする、『よねの賀』なるべし、その時にはかならず」など、聞えかはし、かへり申したまふに、あはれにおぼしつゞけて、「老木の桜またも」など、よみておくり物にしたまひける、かへし、

またこゝに 君がよはひの やそぢあまり

やがてとつげて 出たゝんはや

よろこぼひ給ふものから、さすがにゆくさきのさだめがたさに、うちしめり、涙を袖にかけながら、「ないきはいかに」と、聞えたまへば、

おひぬとも 花さきまされ またもこん

春を契りて 帰るうぐひす

おきなうちわらひて、「偽おほきものにもあらぬを、歌の心おぼつかなし、さるは、あけの年は、かならずとひきますや」と、さいなみたまへば、「あけの年も、その次々の年も、いまより後の春は、いづれも『こん春』とこそ申べけれ」といひければ、「また例のさるがうことを」とて、たれもくわ

らひ出たる。

【現代語訳】二十四日、都に帰ろうということで、朝早く起きて、書き物などをしていると、「人々が」「送別会をしましょう」と、所狭しと駆けつけて来た。あの「翁の」病氣も最近はずっと快方に向かい、気分もよくなつていらつしやるのを見定めて、気がかりではなくなつたのだらう、「あと四年経ったら、今時の人がする『よねの賀(米寿)』ですね。その時には必ず「帰ってきますよ」などと言葉を交わし、返事を申し上げなさるにつけて、感慨深く思い出めぐらしになり、「老木の桜またも」などと詠んで、贈り物になさつた。その返歌、

「あなたが八十八歳になる時に、またここに帰ってきますよ。四年くらいすぐに経ちますよ」と言い残して、旅立つことよ。

しきりにお喜びになるのだけれども、そうは言うものの自らの老い先の不確かさを思うと、湿っぽくなつてしまい、涙を袖で濡らしながら、「内記はいかがですか」と申し上げなされると、「内記は次のように歌を詠んだ。」

お歳を取つても、ますます花を咲かせてください。またやつて来ますよ。春にまた来ると約束して帰つていくウグイスのように。

翁は微笑んで、「偽りが多いわけではありませんが、歌の意味がおぼつかないです(期待できるかどうかわかりません)。それでは、来年は必ずいらしてくださいのか」と責めなさるので、「来年も、その次の年も、将来の春はいずれにせよ『こん春(来る春)』と言ううで

はありませんか」と言つたので、「またいつものようにおふさげになつて」と誰もが笑い出した。

【校異】*聞えかはし 小天地閣本「聞へかはし」(「へ」を「え」に見せ消ち)。*よろこぼひ給ふ 新田本「よろこほ(ぼ)ひたまふ」。
*さだめがたさに 新田本「さた(だ)めか(が)たきに」。*聞たまへば 中之島本・新田本「聞えたまへは(ば)」。

【注】○やまう やまい(病)のこと。○おこたり 病気が快方に向かうこと。○さはやぎ 病気がよくなること。○よねの賀「米の賀」。米寿のこと。○老木の桜 年老いた桜の木。第一段にも見える。

《またここに：歌》○やそぢあまり 八十歳余り。「やがて」に接続し、「やそぢあまりや」で八十八歳に掛ける。○やがて すぐに。ここでは文脈から四年にあたる。

○よろこぼひ しきりに喜び。○さるがう 猿^{さる}樂からの転。滑稽な言動をすること。○こん春 「(来年以降の)これから来る春」と「履軒たちが」来る春」とを掛ける。

《三三》いで汐に棹さして、たち出る。いと名ごりおしとて、をんななども、みな戸のくち^{*}に出たり。誰にかありけむ^{*}、ちいさきをんな^{*}の声して、

めぐりあはん ほどもしらじを 風そよぐ

小篠の上を 露なわすれそ

人々いひつぎたりければ、いとおしがりて、かへしなどせまほしげに、かへりみしつゝ出給ふに、おくりの人おほく、ものいひさはぎたれば、せずなりぬ。都にはいく日か帰りつきけん、はりまの人はしらず^{*}。

【現代語訳】さあ、舟に乗つて出発する時になった。とても名残惜しく思つて、女たちもみな戸口まで出てきた。誰の声だろうか、小さい女の子の声でした。

またいつ巡り会えるか分からない。風がそよいでいる笹の葉の上の「つゆ」(はかないもの)ではないが、私たちのことを「つゆ」(決して)忘れないでくださいね。

人々がその歌を伝え合つたので、「その女の子を」不憫に思い、その歌に返歌をしたような様子で、振り返りながら外にお出になった。しかし見送りの人が多く、あれやこれやと言ひ騒いでいたので、結局返歌はできなかった。

都に帰り着いたのは何日のことだろうか。播磨の人たちは分からなかった。

【校異】*をんななども 小天地閣本「おんななども」。*戸のくち 小天地閣本「戸の口」。*誰にかありけむ 新田本「誰にかありけん」。
*をんなの 中之島本「をんなの」。*はりまの人はしらず 諸本

は、改行してこの九文字を行末に記す。小天地閣本のみ改行せず。

【注】「めぐりあはん…歌」○風そよぐ小篠の上を露なわすれそ『新古今和歌集』卷十六の「風そよぐ篠のをささのかりの夜を思ふ寝覚めに露ぞこぼるる」を踏まえる。○露 笹の葉の上の露と、副詞「つゆ」とを掛ける。

《末尾》

辛卯の年^{*}季春

檻泉三箇

左壅右涸

理債逐人

得一茎禾

屈直委心

寄半行書

奢者不久

板木作土

水驚樹春

自古為都

欲求其郡從和仲

欲知其國問長沮

檻泉 三箇あり、

左は壅がり、右は涸れたり。

債を理めんとして人を逐い、

一茎の禾を得たり。

直きを^な屈げ、心を委ね、

半行の書を寄せたり。

奢れる者は久しからず、

板木も土と作る。

水は驚き 樹は春となる、

古より都と為る。

其の郡を求めんと欲せば和仲に從え。

其の國を知らんと欲せば長沮に問え。

【現代語訳】

辛卯の年（明和八年）の三月

泉が三つあり、左の泉は塞がついて、右は涸れている。

*「檻泉」は井戸。『詩經』采菽に「鬻沸たる檻泉（こんこんと湧き出る泉）」とある。三つの「井」のうち左と右が使えないので、「中井」の意味。

借金を取り立てようと人を追いかけて、一本の稲を得た。

*「債」から「人を逐う（にんべんを取る）」と「責」となる。「責」が「一茎の禾（一本の「のぎへん」）」を得ると、「積」となる。

真っ直ぐなものを曲げて、心のままに、半行の手紙を出した。

*「直きを屈げ、心を委ね」は、「直」を小さくして上に書き、その下に「心」を書く、「恵」となる。それに「半行の書（「行」の半分、すなわち「ぎようにんべん」）」を加えると「徳」となる。

傲慢な者は長続きしないし、版木も「いつかは」土になる。

*「奢」の「者」が無くなる、すなわち「奢」という字の「者」の部分を取ると、「大」という字になる。「板木も土と作る」は、「板」の「木」を「土」に作る」とも読める。「板」という字の「木へん」を「土へん」の字にすると「坂」という字になる。

水が驚いて、樹は春になる。

*水が驚いて「浪」となり、木に春が来て「華」となる。

昔から、都となっていた。

*履軒は難波を「旧都」と呼んでいる。

その郡を求めようと思うのなら、和仲に從え。

*「和仲」は『尚書』堯典に見える。「分かれて和仲に命じて、

西に宅らしめ、…西成を平秩せしむ。(分担で和仲に命じて、西方に居らせ、…万物の成就を平均し、秩序づけさせた。)」とある。ここで「郡を…和仲に従え」と言うのは、つまり「西成郡」のこと。

その国を知ろうと思うのなら、長沮に聞け。

*長沮は『論語』微子篇に見える。「長沮・桀溺、耦して耕す。

孔子之を過り、子路をして津を問はしむ。(長沮と桀溺が並んで耕していた。孔子がそこを通りかかり、子路に渡り場を尋ねさせた。)」とある。ここで「国を…長沮に聞け」と言うのは、つまり「(撰)津の国」のこと。

以上のことから、この末尾は次のように読める。

「中井積徳、大坂、浪華旧都、西成郡、撰津国。」

【校異】*辛卯の年 新田本「辛卯のとし」。

【注】この謎詩は、履軒著『通語』や『典謨接』の末尾にも見える。

解説

一 事実と虚構

これまで『昔の旅』は、その道中記的な内容から「紀行文」と見なされてきた。しかし、写本の一つ「新田本」には『旅のむかしかたり』と題されていることから察せられるように(四「底本・諸本」参照)、昔の博士

らの旅として語るといふ虚構を前提とするものであるから、厳密には紀行文とは言えず、「紀行体の物語」と見るのが妥当であろう。

とはいえ、明和八年(一七七二)の春に竹山・履軒が龍野を訪れたのは事実であり、のみならず作中人物の多くも実在する。例えば「稲垣」子華(訳注第五段。以下、(二五)の如く表示。)や「よし」(一四)、「親にけうふかきをうな(はつ)」(一六)、「教順が妻(さん)」(一九)、「親は、みな幕府・領主から褒章を受けた孝子貞婦である(三「孝子貞婦の顕彰」参照)。また博士一行に送別の詩を贈った「与隣」「彪外」「子淵」(三)も懷徳堂と関わる人々であった。ここでは作中に実名では登場しない人物について、そのモデルを指摘する。

「岡の翁」 竹山・履軒兄弟の祖父玄端は龍野藩の藩医であった。兄弟の父贅庵(一六九三〜一七五八)はその四男で大坂に出、藩医の家督を継いだのは玄端の次男、すなわち兄弟には伯父にあたる伯元(一六八八〜一七七五)である。伯元は医業の傍ら書を読み和歌を嗜む粹人で「鳳岡」「睡翁」と号したが、それは「岡の翁」を連想させる。また明和八年は伯元の八四歳に当り、作中の「岡の翁は」いま四年たちなば(中略)よねの賀(米寿)なるべし(三二)との記述に符合する。博士・内記の「おぢ」とされる「岡の翁」は、竹山・履軒の伯父伯元がモデルと見られる。

「文章博士」「内記」 「文章博士」は竹山、その弟の「内記」は履軒、であろうことは容易に察しが付くが、作中の詩によっても裏付けられる。博士が送別の宴および掛保川下りの際に詠んだ詩「春酒卜良会」(四)、「載酒扁舟下急灘」(二七)は、ともに竹山著『貧陰詩集』巻四(辛卯、明和八年)にそれぞれ「与弟处叔之龍野留別諸友」「舟下羅干」の題で収録される。また博士は作中で「いたうものめでする人にて」と、その善行を賞賛する性格が描かれるが、これも実際の竹山と一致する。これらから、

基本的に竹山が「博士」のモデルであると考えられる。

次に「内記」は、作中に「この君は、いたうふるきことをめでしたふはんしやうにて、韻なども、いにしへのをとりにて」(二三)と描かれる。実際、履軒は古韻に関心が深く、自ら古体詩(古風とも称す)を制作し、作品集『履軒古風』もある。この龍野行きのあった明和八年は、履軒が古韻に関する著作『諸韻瑚璉』(明和六年)、『履軒古韻』(同七年)を著した時期と相前後しており、履軒の古韻への関心の高まりが、古韻を好んだと描かれる「内記」に反映していると思われる。加えて、内記が作中で詠んだ詩「載薪樵兮水路熟」(二七)は、実際に『履軒古風』卷三に「舟人詞」と題して収録されている。

このように物語および登場人物は基本的に事実にもとづく。もつとも、全てが事実を写しているとは言えない。例えば、作中に「今やう」(箏組曲)の歌詞を源生・野生・博士がそれぞれ漢詩に翻訳する場面があるが(一二)、この漢訳は履軒撰『履軒古風』卷三に「箏曲三首」の題で見えることから、実際は履軒の作であろう。履軒は自作を博士ら三人に割り振ることで、三人が次々と翻訳を披露し合って旅の一夜を楽しんだという虚構のエピソードを創り出したものと思われる。

虚構ということに関して言えば、『昔の旅』における最大の虚構は〈昔の公家の世界〉という設定である。これは履軒の公家世界に対するあこがれ(と同時にコンプレックス)の表れと見るべきであろう。ただ、これも履軒の実体験が根底にある。履軒は、明和三年(一七六六)十一月、京都の高辻家から賓師として招聘され、翌四年十一月までの一年間京都に滞在した。高辻家は本姓が菅原氏、代々大学頭・文章博士の家柄で、当主の世長(後に胤長と改名)は式部大輔兼文章博士だった。なお、履軒著『華胥夢語』所収「破腹巻記」でも、自らを武士として設定しており、履軒の自

意識として為政者に近いものがあったことは注目すべきであろう。

このように、履軒は自らの京都体験に構想を得た〈昔の公家の世界〉を場とし、そこに和歌漢詩・虚構のエピソード等を盛った。しかし、大筋となる龍野行き、登場人物など物語の骨格は事実に基づいている。作中の博士・内記の活動の一つ一つを事実とする根拠を示すことはできないが、細部は別として大略は事実を反映したものと考えられる。

二 旅程

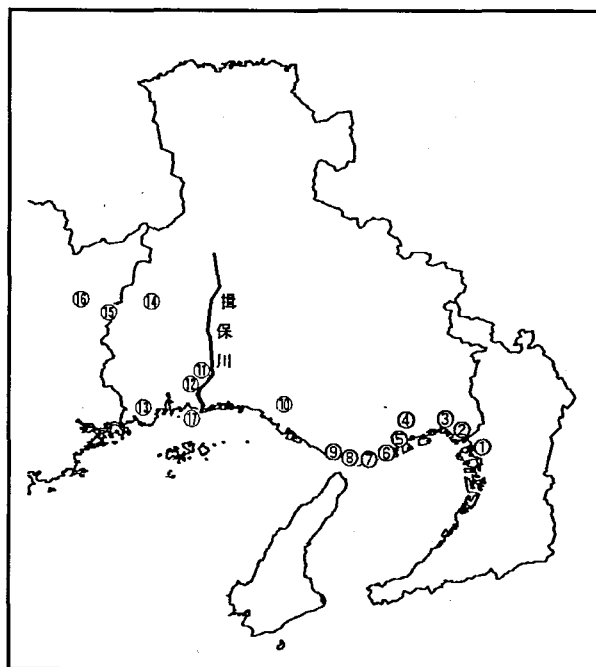
『昔の旅』に記されるのは、三月三日夜の出発から三月二四日の別れまで二日間のことである。その旅程の概略は次の通りである。特に記さない場合は、博士・内記らの共通行動である(事項の下の〈 〉は該当箇所段落番号)。

月日	事項(発着・通過・滞在等の地、主な出来事)
三月 三日	夜、送別会。難波より舟出。(二・三〇五)
四日	明方、尼崎上陸。(二・五)
	甲山を望み、西宮、布引滝、湊川を経て、福原泊。(六〇八)
五日	福原発。淡路島を眺め、須磨、舞子、明石を経て、加古川泊。(九〇一二)
六日	揖保(龍野)着。「岡の翁」と対面。貞婦「よし」が来訪。(一二・一四)
七〜十日	——記述なし。——
十一日	揖保。一族の墓参。(二五)
一二日	揖保。孝女(はつ)を訪問するが、不在。(二六)

- 一三日 掛保。孝女(はつ)が来訪。(二六)
- 一四日 さい村へ。盲人の妻に会う。貞婦(さん)を訪問(二三日か)。(一七・二二)
- 一五日 博士は、文章生・知人二三人を伴い、父方の祖父の墓参に赤穂へ出発。(二三)
- 内記は、上津の知人の子・美作の知人(稲垣子華)の子を伴い、長谷へ母方の祖父の墓参に出发。上津(長谷付近)泊。(二一・二三)
- 一六日 博士ら、赤穂より帰る。(二五)
- 内記、墓参。帰る予定を変更し、杉坂を経て、美作の子華に会いに行く。子華宅泊。(二四・二五)
- 一七日 内記、一人で帰路につく。上津泊。(二五)
- 一八日 内記、掛保着。(二五)
- 一九日 — 記述無し。 —
- 二〇日 川舟で網干へ。海舟に乗り換え投石見物。投石付近の民家泊。(二六・二九)
- 二一日 室津を経由し龍野着。(二九)
- 二二日 龍野。河辺での遊び。(三〇)
- 二三日 — 記述無し。 —
- 二四日 龍野の人々と別れ帰途に着く。(三一・三二)

履軒・竹山は何度も龍野を訪れているが、ある年の龍野行きの記録が履軒の雑記帳『日録』(懷徳堂文庫所蔵)に見える。参考までに往路のみ抜粋する。「十月十夜五時上船、四時尼崎着岸。十一日登岸、此夜宿明石大倉谷。十二日高砂廻り、宿姫路。十三日五時入龍城。」この『日録』の旅

の場合、五時(二〇時頃)大坂で上船、四時(二三時頃)尼崎着岸、恐らく翌日早朝に登岸し旅立ったと思われる、ならば『昔の旅』と同様である。ただ『日録』の場合、十三日の龍野着の時刻は、姫路・龍野間が約一五キロと大した距離ではないことから、恐らく午前の五時(現在の八時頃)で、とすれば尼崎から龍野までに要したのは二日と数時間である。一方、『昔の旅』の場合は、三日目の夕方に龍野到着なので、ほぼ三日を費やしており、少しのんびりした旅だったと思われる。



- ①難波 ②尼崎 ③西宮 ④布引の滝 ⑤湊川 ⑥福原 ⑦須磨
⑧舞子 ⑨明石 ⑩加古川 ⑪掛保(龍野) ⑫佐江村 ⑬赤穂
⑭長谷 ⑮杉坂峠 ⑯田殿(子華宅) ⑰投石

(海岸線は現在のもの)

三、孝子貞婦の顕彰

『昔の旅』で注目されるのは、博士一行が「よし」(一四)、「親にけうふかきをうな」(一六)・「教順が妻」(一八)・「孝子貞婦に会い、その美德を称揚して金品を贈るなどしていることである。彼女らはみな実在し、後掲の資料から「親にけうふかきをうな」は「はつ」、「教順が妻」は「さん」と知られる。「はつ」は明和六年、「よし」は同七年、「さん」は同八年五月に、それぞれ龍野藩主より褒美を受けている。のみならず各人の行状は、『孝婦鳴盛編』(明和九年二月)、『龍野鳴盛編』(刊年未詳)、『播州龍野四孝伝』(安永五年・一七七六刊)によって紹介顕彰された。『孝婦鳴盛編』は股野充美の著で、「よし」の孝行を顕彰する股野の文章「龍野孝婦之小伝」、それと彼女を称賛する一二四名の漢詩和歌とから成り、竹山の寄せた跋を付している。『龍野鳴盛編』『播州龍野四孝伝』はともに、『孝婦鳴盛編』所載の股野の文章を主とし(漢詩和歌は載せず)、附録として「よし」以外の三人の孝子貞婦を顕彰する文章三篇を加えたものである。いわば『龍野鳴盛編』『播州龍野四孝伝』は股野の『孝婦鳴盛編』の増補版で、その内容は次の通り。(一)に記したのはその文章が書かれた日付である。

股野充美著「龍野孝婦之小伝」

(「よし」のこと。明和七年閏六月二三日)

高尾義典著「八木氏が妻其父に孝行の事」

(「はつ」のこと。明和八年五月)

石原公章著「播州佐江村貞婦小伝」(「さん」のこと。明和八年四月)

小西尚徳著「恵比須屋が行状の略」

(網干の恵比須屋甚次郎のこと。明和八年初夏)

これに加えて、竹山も「さん」を顕彰して『貞婦記録』を著した。草稿の日付「辛卯の卯月(明和八年四月)」からすると、龍野より帰坂した直後の執筆である。

『昔の旅』に登場する人物について、この一連の褒賞と顕彰活動とを、時を逐って整理すると次のようになる。

- ① 「はつ」褒賞(明和六年)
- ② 「よし」褒賞、股野「龍野孝婦之小伝」による「よし」顕彰(ともに明和七年閏六月二三日)
- ③ 竹山・履軒の「よし」「はつ」「さん」訪問(明和八年三月)
- ④ 石原「播州佐江村貞婦小伝」・竹山「貞婦記録」による「さん」顕彰(ともに明和八年四月)。
- ⑤ 高尾「八木氏が妻其父に孝行の事」による「はつ」顕彰(明和八年五月)。「さん」褒賞(明和八年五月一九日)。

これによれば、③の竹山・履軒の龍野行きの直後に相次いで、④・⑤と石原・高尾によって「はつ」「さん」顕彰の文章が書かれ、竹山自らも帰坂直後に「さん」顕彰の筆を取っていることが見て取れる。

この一連の顕彰運動の先駆となった股野充美(字は玉川。一七三〇〜一八〇六)は龍野藩の儒臣で、竹山とは共に藤江熊陽に教えを受けた兄弟弟子という親密な交友関係にあった。著に前掲の『孝婦鳴盛編』の他、龍野藩内の孝行者の行状を記す『天民録』(寛政四年・一七九二)があり、明和・安永期(一七六四〜一七八二)には稲垣子華を訪ねるなど、懷徳堂とも関わりが深く、また孝行への関心の強い人物であった。また股野の『孝婦鳴盛編』の「増補」に協力した高尾ら三名はみな龍野藩士で、股野と極めて親しい関係にあった。以上のことから、これら一連の顕彰運動は、股

野ら龍野の人々と竹山との連携によって展開したと見る事ができよう。

これまで竹山の孝子貞婦顕彰として、稲垣子華や京都西岡の義兵衛（後述）に関する活動は注目されてきたが、龍野に関する活動は貞婦「さん」への募金呼びかけが紹介される程度であった。しかし、竹山にとつて龍野での活動は、子華や義兵衛らの顕彰運動の展開として意義あるものであった。『貞婦記録』の中で竹山は、「さんを援助したいが、我が家計も不如意ゆえ」去し比、西岡の孝子をたすけし前蹤に随ひ、乏しき囊をさぐりて、其余を門人ならびに親しき人々に乞はんとす。」と述べる。「西岡の孝子をたすけし前蹤」とは、竹山が京都西岡（竹山の妻の実家の所在地）の孝子義兵衛を顕彰し、同時に彼のために義捐金を募った活動を指す。この結果、義兵衛は御所から褒賞を賜り、竹山著『孝子義兵衛記録』加藤景範著『かはしまものかたり（革島語）』によって顕彰された。

また龍野での活動は、子華・義兵衛の顕彰に並ぶ重要な柱とも見なされた。竹山は、「子華、義兵衛の他」近ごろ播（播州）の龍野に、又孝婦芳貞婦参有り、俱に本藩の賞を受く。藩は吾が本土に係る。（中略）今にして廻ち一時の美譚を我門に鐘むるを得たるは、是れ予の尤も訢然たる所なり。『かはしまものかたり』竹山跋」と述べ、龍野の「よし」「さん」を子華・義兵衛と並べて一門の美談に位置付けている。

今回の研究によって、『昔の旅』が、龍野における懷徳堂の孝子貞婦顕彰のありさまを髣髴させ、龍野の同志との連携を窺わせる資料であることが明らかになった。龍野での活動が、龍野の同志と連動した地域的、人的な広がりをもって展開したらしい点は注目される。

四、底本・諸本

最後に、訳注の底本および校合に用いた諸本について、先ず書誌を記し、

その後に底本と諸本との関係に言及する。

【底本】

大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵本（略称「懷徳堂本」） 1冊 自筆稿本

〔寸法〕外形縦二四・六×横一六・〇。〔書式〕無郭無界の紙を使用。九行二〇字前後。〔内題〕なし。〔外題〕書題簽「昔の旅」と藍筆書。帙題簽「昔の旅全一函一本履軒手稿」。〔印記〕第一葉表「天生寄進」懷徳堂圖書記「大阪大學圖書之印」「履軒圖書」。受入印「昭和三十九・十二・二十二入 105021」。〔装丁〕四針眼訂法。全二八葉。〔備考〕朱筆の句点、訂正あり。水哉館遺書。小口書「昔旅」。〔蔵書票〕「蔵 4 249」。〔付箋番号〕「208」。

【諸本】

① 懷徳堂文庫新田文庫蔵『履軒先生遺稿雜集』所収本（略称「新田本」） 一冊 写本（履軒手稿であろう）

〔寸法〕外形縦二四・六×横一六・六。〔書式〕無郭無界の紙を使用。一〇行二〇字程度。〔内題〕なし。〔外題〕「旅のむかしかたり」と打付け書き。〔刊記〕なし。〔印記〕表紙右下「新田文庫」。第二葉表「9CLO0610 堀沼図畔」。第二葉裏「大阪大学附属図書館」。〔装訂〕仮綴。全三二葉。〔備考〕朱筆の句点、訂正あり。底本の二四葉表三行目「なき数の」一六葉裏「けしきなし」（訳注第一五段途中、第一八段に該当）が欠葉。〔蔵書票〕なし。〔付箋番号〕なし。

② 大阪府立中之島図書館蔵本（略称「中之島本」） 一冊 写本（明治期、書写者未詳）

〔寸法〕外形縦二七・〇×横一九・三。〔書式〕無郭無界の紙を使用。一〇行二〇字程度。〔内題〕なし。〔外題〕書題簽「昔の旅」。〔刊記〕なし。〔印記〕遊紙裏「大阪府立圖書館・明治四十四年三月三十日 34187」。第一葉表「大阪府立圖書館藏書之印」。〔裝訂〕四針眼訂法。全二四葉。〔備考〕墨筆の訂正あり。〔藏書票〕「223.6/48」。〔付箋番号〕なし。

③ 懷徳堂文庫碩園文庫藏『小天地閣叢書^{十三}』所収本（略称「小天地閣本」）

一冊（数種の書と合冊） 写本。

〔寸法〕外形縦二七・二×横一八・八。〔書式〕無郭無界の紙を使用。一二行二五字程度。〔内題〕なし。〔外題〕書題簽「小天地閣叢書 乾集」「五井蘭洲 新題百首和歌／中井竹山 新題百首詩／中井履軒 昔の旅／附 履軒行狀／書院揭示／五舍銘／良齋行狀」。冊子中の一葉に「昔の旅」と打付け書き。〔刊記〕なし。〔印記〕第一葉裏「大阪大學收藏圖書印」〔記号226.9.10 收入 32905〕。第二葉表「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書」「碩園記念文庫」。〔裝訂〕四針眼訂法。全一七葉。〔備考〕仮名はすべて通行仮名で記す。朱筆の句点、訂正、濁点あり。〔藏書票〕「壬／左／8」。〔付箋番号〕なし。

底本と諸本との関係について、諸本②③は、底本と表記・内容に重要な差異が殆ど見られず、底本を元に伝写されたことが知られる。懷徳堂本を翻刻訳注の底本とした所以である。一方、諸本の①新田本は、「旅のむかしかり」と題される他、漢字仮名の表記において底本および諸本②③との差異が大きい。また内容においても、底本および諸本②③には記される第三段の送別詩の作者「与隣」「恥叔」「彪外」「子淵」が、新田本では全て記されないという違いがある。ここでは主な差異について底本と新田本

とを対照し簡単に考察する。へは該箇所段落番号、（A↓）Bは元はAとあつた記述がBに訂正されていることを示す。

a	b	c	d	e	f	g
底本	底本	底本	底本	底本	底本	底本
新田本	新田本	新田本	新田本	新田本	新田本	新田本
くちおしきや（九）	（なりけんかし↓）なるべし（一二） なるへ（べ）し	（老の翁↓）老たる翁（一四） 老たる翁	（あはれがりて↓）あはれがり（一四） あはれか（が）り	（文かきてこせよ↓）文こせよ（二一） 文こせよ	（けふしも↓）よきげちや得たりけん 勢ひまうになりて（二九） けふしも	ひきいりけり（三〇） （ひきいりける↓）ひきいりけり

対照表から察せられるように、底本には推敲の跡が多く（b・c・d・e・fの五例）、かつそのほとんどが新田本に反映されている（f以外の四例）。一方、新田本には推敲ではなく脱文を補う校正の跡が多く見られる。以上のことから、底本は草稿本、新田本はその改稿本ということになる。

- (一) 吉田鋭雄『懷德堂水哉館遺書遺物目録』(『懷德』第一七号、昭和四年)は「昔文章博士が、弟の岡の翁といふ内記と文章生二人とを伴ひて、浪華より播州巡りをしたる詩歌入の仮名文の紀行文である(傍点は本稿筆者)。(五九頁)とする。『懷德堂文庫圖書目録』(大阪大学文学部、一九七六年)も「日記・紀行」に分類する(国書部六三頁上段)。その他、国文学研究者も近世紀行文の資料と見なしている。板坂耀子「近世紀行文紹介 その五」(『福岡教育大学紀要』第四一号、第一分冊、一九九二年)は、『昔の旅』を次のように紹介する。「友人二人、従者一人と共に、明石付近に桜を見に行く紀行文(傍点は本稿筆者)」
- (二) 福島理子「中井履軒『百首贅々』——真淵批判と景樹『百首異見』への影響——」(『懷德』第五九号、平成二年)が「履軒は折々好んで和文の歌物語などを草しているのであるが、その中に『昔の旅』と言う和漢の詩歌を折り混ぜた紀行体の物語がある(傍点は本稿筆者)。」とするのを参照。
- (三) 竹山著『貧陰詩集』巻四所収「与弟処叔之龍野留別諸友」(辛卯、明和八年)に「春酒卜良会」と見え、また竹山著『貞婦記録』(草稿「辛卯の卯月」付)に「ちかきころ、予か弟と俱に、龍野に下り(後略)」と見える。
- (四) 「与隣」は『大日本史』筆写の協力者として見える原与隣。「彪外」は竹山の弟子の辻本氏。「子淵」は懷德堂三代目主三宅春楼の嗣子、名は光同、号は西海。第三段注参照。
- (五) 「はつ」「よし」は、『官刻孝義録』巻三「播磨国にそれぞれ、」孝行者(中略)はつ 六十二歳 明和六年 褒美」「孝行者(中略)よし 四十六歳 明和七年 褒美」と見える。「さん」は何故か『官刻孝義録』に見えないが、龍野藩領内において藩から表彰された孝行者等の行状を記す股野玉川著『天民録』には記録され、これによると明和八年五月十九日、さん三十六歳の褒賞である。
- (六) 股野玉川の日記『幽蘭堂年譜』に、「明和九年壬辰二月廿八孝婦鳴盛編板本出来」と見える(『播州龍野藩儒家日記——幽蘭堂年譜——』清文堂、一九九五年)。
- (七) 股野玉川著『幽蘭堂年譜』の明和八年二月十八日条に、玉川の四十二之年賀に友人十四人が玉川を訪れ酒宴となったことが見えるが、その中に小西尚賢、高尾欽蔵(義典)、石原順蔵(公章)が見える。小西尚賢(一七四三—一八二四)は竹山らの伯父伯元に医を学んだ人物。その子小西惟冲(号は澹斎。一七六九—一八五五)は竹山の門人で、龍野藩儒となった。高尾義典(字は欽蔵、号は蘭谷)については未詳ながら、玉川と共に美作の稲垣子華を訪問するなどしている(『幽蘭堂年譜』明和五年二月一日条)。石原公章(字は有文、号は竹里、通称は順蔵)は玉川より年少の藩儒である。
- (八) 西村天因著『懷德堂考』下巻「好善の家風」(明治四四年)、加地伸行編『中井竹山・中井履軒』(明徳出版社「叢書・日本の思想家二四」、昭和五五年)第二章第五節「孝子顕彰運動」(小堀一正執筆)に見える。後者は稲垣子華・義兵衛については詳細だが、龍野の活動については『貞婦記録』に見えるさんへの募金活動を紹介するにとどめている。なお『龍野と懷德堂——学問交流と藩政——』(龍野市立歴史文化資料館「図録二四」、平成二二年)は、「孝の実践を尊重し、孝子の顕彰活動を行った」懷德堂の動きは、困窮

化する中で秩序に不安を持ちはじめた龍野の人々にも影響を与え、龍野領内における孝子孝女の顕彰を盛んなものにしていった。」(第Ⅱ部 2 (2)「孝子表彰」と述べ、懷徳堂の龍野に与えた影響を簡潔に指摘する。

(九) 原文「近播之龍野、又有孝婦芳貞婦參、俱受本藩之賞、藩係吾本土、(中略)今而廻得鐘一時美譚於我門、是予之尤所訢然。」

(十) 書誌情報の項目は、平成一三年度から一五年度に行われた懷徳堂文庫貴重資料調査での調査項目に拠った。『デジタルコンテンツとしての懷徳堂研究』(平成十三年度・十五年度 科学研究費補助金 基盤研究(A)(2) 研究成果報告書 研究代表者 下條真司) 所収の湯浅邦弘「懷徳堂文庫貴重資料解題」の解題凡例を参照。

(十一) 懷徳堂文庫を構成する文庫の一つ。昭和五四年(第一次)および昭和五八年(第二次)の二度にわたって中井家遺族の新田和子氏から中井木菟麻呂氏旧蔵の遺物書籍を寄贈された。第一次新田文庫収蔵の書籍について、池田光子「第一次新田文庫暫定目録」『懷徳堂センター報二〇〇四』、大阪大学大学院文学研究科・文学部懷徳堂センター)がある。

(十二) 中之島図書館に、異なる書ながら同様の装訂の写本が複数有り、その内の一本に書写時期を明治と記すことにより、これも明治期の写本と推測される。

(十三) 西村天因(一八六五―一九二四)が編集した文献善本の写本叢書で、乾坤二集一四三冊からなる。